
ナイアーラトテップの微笑み

Sitz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイアーラトテップの微笑み

【Nコード】

N1826W

【作者名】

S i t z

【あらすじ】

ナイアーラトテップに微笑まれたあなたへ！

これを読んでいるあなた、あなたは神に微笑まれた幸運な人間の一人です！

このようなぶしつけな手紙に不信感を抱かれる人もいるかもしれませんが、どうかご安心ください。

そして信じて下さい。今あなたの目の前にあるものは、真実、『人としての夢を叶えるゲーム』なのだ。

序／チュートリアル

拝啓 ひつき・せいや 日月星弥様

『ナイアーラトテップに微笑まれたあなたへ！

これを読んでいるあなた、あなたは神に微笑まれた幸運な人間の一人です！

このようなぶしつけな手紙に不信感を抱かれる人もいるかもしれませんが、どうかご安心ください。

そして信じて下さい。今あなたの目の前にあるものは、真実、『人としての夢を叶えるゲーム』なのだ。

最初に宣言しましょう。このゲームの勝利者には、あらゆる願いを一つだけ叶える権利が与えられます！

……あー、ちょっとちよつと。

落ち着いて下さい。手紙を閉じないで。丸めて捨てようとししないで下さい。

馬鹿らしいと思うのも、アホらしいと思うのも、間抜けらしいと思うのもあなたの自由ではありますが、まずはこの手紙を手にとって読んでくださっているあなたに信じてもらう為に、封筒の中身をひっくり返してもらわなければなりません。

そう、この手紙が入っていた封筒です。

その中を覗いてみると……おおっと、ひっくり返すなら手をかざして、落とさないように！

はい、出てきましたね、あめちゃんの一つ。そうです、それはキヤンディーです。

そのお菓子の名前は『ラヴクラフト』。

味はなんといちご味、メロン味、レモン味、ぶどう味、コーラ味の五種類の中から、無作為に一つ厳選されています！

……いや、待って待って、だから落ち着いて。

飴をゴミ箱にいれないで下さい、べたつきますよ。

お掃除が大変ですから、そこはまあ我慢して、次の文章へと目を移そうじゃありませんか。

……とまあ、ここまで手紙を読んでもくれているあなたなら、もうそんな心配もないのでしょうか。

それが興味本位であれ私を信じて下さってのことであれ、ただの暇つぶしであれ。聞くに値する話であると私は自負しております。

では、本題に入りましょう。

今現在、これと同じ内容の手紙が入った封筒が、この街で百通配られています。

割と少ない？ それとも多い？ 感じ方は人それぞれですね。し

かし、実際にこんなくそ長ったらしい文章をここまで読んでくれて、これ以降の内容も読んだ上で参加してくれる方の割合を考えれば、まあ妥当な数なんです。

……あ、やたら茶々を入れてきてうざいと思っている方もいらっしゃるでしょうが、性分なのでご了承ください。

文章が冗長気味なのは直したい悪癖なのですが……っとこれも脱線ですね、失礼しました。

さて、その封筒には共通してこの手紙と、そちらの飴が一つ（これは五種類の内一つです）入っています。

このゲームへの参加条件は三つ。

1. この手紙を所有していること（失くさず、大切に保管して下さい）
2. 飴を舐めること（嚙んだり飲んだりせず、綺麗に舐め切りましょう）
3. 上記を満たした上で、この手紙を受け取った翌朝六時までに参加証が配布され、それを所持している者（1, 2を満たしていればすぐに配布されます）

以上を満たした者が、参加者として『ゲーム』に参加することができます。

次に、勝利条件です。この条件を満たした時、あなたはゲームの勝利者となります。

勝利条件は、ただ一つ。

『あなた以外の参加者が全員失格となり、最後の一人となった場合』

シンプルにして簡潔、それでいて王道の勝利条件となっております。

そして、勝利した人間の前には主催で代表者である私、ナイアラトテップ（勿論、偽名でございます）が馳せ参じ、どのような願いでも一つだけ叶える事が可能となっているのです。

では、勝利条件、賞品ときたので、次は失格条件に関して。
失格とはいかなる場合を示すのか？ それは以下の二つです。

1. 参加証を何らかの形で失った場合（これは紛失や盗難ではなく、破壊、破損といった形での失う、です）
2. 何らかの事情により、ゲーム続行が不可能になった場合（戦意喪失や人身事故、はたまた家庭の都合など、etc）

つまり、あなたがこのゲーム中に何をするのかを一言でまとめる
と、

『敵プレイヤー全てをリタイアさせ、最後の一人になれば勝利』
！
たったこれだけ！

さて、ここまでの基本的なルール説明を把握したうえで、疑問に
思った方もいるでしょう。

そう、ゲームの勝ち方や負け方はわかったが、つまるところどう
やって競い合うのか？

それは、上記の参加条件に記されている、飴に秘密があるのです！

……おっと、もしかしてそのあなた、もう舐めちゃったりしてませんか？

もしも舐めてしまったのなら、今すぐ郵便受けだとか、自分のポケットだとか、窓際に止まっている一羽の小鳥さんだとかを調べてみてください。

あなたにはすでに参加証が配られているはずです。そちらをご確認下されば、こちらの手紙はもう必要ありません。あなたが勝ち残るその日まで、大切にしまっておきましょう。

では、まだ飴を舐めていない、用心深くも疑いの心を絶やさないあなたへご説明しましょう。

別に読まなくても構いません。めんどくさい人は、飴をさっさと舐めて、参加証を胸に、明日からの戦いに備えましょう！

次の歴史の1ページへ、ちゃっちゃと行っちゃってください！

大丈夫。あなたのような方なら、きっとそれだけで、ゲームの攻略法がわかっているはずです。

続きが気になる人だけ、裏面へ続きます。』

「……やべ、舐めちゃったよ……」

星弥は愕然とした。

——舐めたかった。

元々喉が潤っていないと気が済まない性質で、常に飲料水か飴を持ち歩いているような男だ。

それが今日に限って、学校の都合で家路に着く頃には近場のスーパーは閉まっており、家には飲み物がなく、飴もなく、水道水では

口が寂しい夜だったのだ。

——飴を、舐めたかったのだ。

非常識というのはあまりにも酷だろう。飴が舐められずイライラしている時に、郵便物から飴が出てきたら……舐めるだろう？

俺ならそうする。星弥は自分の中でそう結論付けた。

しかし、星弥にとってなおショックだった事といえば、

「……しかも、飲んじゃったよ……」

手紙を読んでいる途中で飴の記述に驚き、ごくりと誤ってしまった事にあった。

飴とはなめるもの。舐める、ゆえに飴あり。舐めない飴はただの飴だと言わんばかりに、星弥は飴を舐めきる主義だった。

小さくなったからといって噛み砕かないし、飲み込みもしない。質量が固形として無に帰すその時まで味わい尽くすのが習慣だ。

だから、飲み込んでしまったのがほんの少しだけショックだった。ぶっちゃけ、ちょっとショックだっただけで、別に傷ついたりしていない。

問題は、この手紙の内容にあった。

「願いを叶える、ねえ」

ぺらぺらと紙を振る。裏面がちらりちらりと見える。

「……ふむ」

裏面に軽く目を流して、星弥はその一文に目を止めた。

『この飴玉、ラヴクラフトは奇跡のお菓子！

単刀直入に申しましょう！

なんと、舐めるだけで超能力が使えるようになります！』

「……はあ。超能力が備わる、ねえ」

既に飴を摂取した星弥は、その文だけをみてまずは自分の体の確

認をする。

とはいえ、体の異変を探そうとするも、別に右手に激痛が走ったり、腹の奥底から煮えたぎるような熱が発生したり、ドクン、と心臓が脈打って動悸息切れ気付けに急進したりもない。

見た目はどうかだろうか。そう思い立って星弥は移動する。

狭い一人暮らしの部屋、細まったキッチン兼、玄関前廊下のT字路を進み、左手の風呂場の戸を開けた。

そこに鏡があるので、電気を点けて自身の顔を確認する。

……日月星弥、などと昭和のアイドル地味な名前をしている少年は、かくしてそのような顔立ちの少年であった。

十七歳という年頃にして170弱の程良い身長。黒い髪は煩わしくないように短く切られ、やや重力に逆らっているが、それが星弥の力強くも清潔感のある目鼻によく似合っていた。

今時系のチャラチャラした風体ではなく、どちらかといえば年上の大人たちに受け、女性よりも男性に好印象を持たせるようなさわやかな容姿の少年、それが日月星弥である。

「別に目に王の力とかも宿ってねえな……首筋に契約の印もないし」
ただし、中身はややインドアである。

「えーと、なんだっけ」

星弥は見た目の変化の有無を確認してから、手紙の飴の記述を読みなおす。

飴には五種類あり、いちご味、メロン味、レモン味、ぶどう味、コーラ味からランダムに一つが入っているという。

そしてこの飴を舐めると、参加証とやらが届くのだとも書かれていた。

なるほど、味か。五種類あるという事は、味で効果が変わるのかもしれない。星弥はそう思い、ふと疑問に思った。

ところで、俺が飲んだのは何味だ。

飲んでしまったからわからないね。

なるほど、わからないね。

軽く自分を小突きながら、星弥は次の行動を模索する。

「……参加証か」

そんな一言で思考を絶ち、星弥は次にポケットやバスタブの窓際を確認しだす。

しかし、それらしいものはない。

いや、あったらあったでそれは困るんだが。そう思いつつも、星弥は少しの期待を胸に、再び玄関に戻って、ドアに備え付けられた郵便受けを確認した。

先ほどの手紙を手にしたばかりだし、流石にここに今あったら驚きだろう。そう苦笑しながら手を入れて、がさごそと漁る。

……そこに、それはあった。

硬質な手触りはクレジットカードや学生証、レンタルビデオ店の会員カードを彷彿とさせる一枚の板。

材質はプラスチックのようで、大きさも前述したカード類のそれなのだが、質量に対して重量感を感じさせる不思議な代物だった。

色は黒で、目玉のようなロゴマークが壁紙のように並べ立てられている悪趣味なデザインである。

その表裏を確認して、両方同じデザインだったところで、星弥はこれが参加証なのかどうか疑問に思った。

このタイミングでこんな不気味なものが出てくれば、手紙のいう参加証ではないかという連想をするのは自然だ。

だがしかし、ただの悪戯ならばこの話はここまでだ。参加証という名の不気味なカードを手にくきうきしたところで、日付が変わり、明日の朝になったところで超能力なんて手に入らないし、願いを叶

えるというゲームも始まりはしない。

……試しに両手でそのカードに力を入れてみるが、すごく弾力があり曲がるものの折れるところまではいかず、また水で濡らすと水を弾き、もういいやと投げやり気味に火にかけてみても燃える素振はなかった。

不思議な材質もあつたものだ。星弥はその程度に考えて、台所の脇にそのカード置いて、欠伸をする。

なにせ、不気味なだけで何も変化がないのである。

手紙の書き筋からして、参加証を確認すればその全容が明らかになるはずなのだから、あのカードに変化がない以上、それは悪戯と断言していいものだろう。

「ねみー。飯はいつか……」

そんな一言と共に、星弥はベッドに飛び込んだ。

狭いキッチン兼廊下兼玄関の先にある、七帖ほどのフロアリングの一人部屋。その右隅にあるベッドに横たわり、その日の夜は過ぎ去っていった。

耳をつんざくような電子音で星弥が目を覚ましたのは、それから数時間後の事だった。

携帯のアラームは然り、デジタルな目覚ましでも中々出せない、防犯ブザーに匹敵する強烈なコール音である。

「え、なに!? なに?!」

ベッドから飛び起きるなり機敏に動き出した星弥は、辺りを確認して、音源がキッチンにある事に気づく。

フローリングへの一步を踏み出し、駆け足で近づいて……電子音を発する”それ”を、手にする。

音は、途端に止んだ。

キッチンの電気をつけて、星弥は時計を確認する。

午前六時を過ぎたところだ。

それを確認して、改めて手にしたその物体……昨夜の黒いカードを見る。

いや、と星弥は瞬時に認識を改めた。

それは、不気味なカードなどではない。既に……変化が現れていた。

『ナイアールトテップに微笑まれたあなたへ』

カードの片面に浮かび上がる、青く光る文字。右から左へとルールを続けるスクロールテキストは、明確にそれがあの手紙に関するものである事を示していた。

右下に、逆三角のポインターが現れている。直感的にそこを親指でタッチすると、文字が切り替わる。

『本日午前五時五九分をもって、貴方のゲーム参加を承認しました。▽』

『参加締め切りである本日午前六時に達しました。”ゲーム”の開始を宣言します。▽』

『参加者は総勢二十三人となりました。以後、残りのプレイヤー数は日付変更線到達と共に発表されます。▽』

『また、1ゲームの開催は十四日間。十四日目の朝六時をもってゲームは終了となりますので、ご注意ください。▽』

『ゲーム終了までにプレイヤーが二人以上残っていた場合、勝利者はなしとなり、没収試合となります。▽』

『それでは、以後のことにしましては、参加証をご参照の上、ゲーム”を心ゆくまでお楽しみ下さい。▽』

「……なんだこりゃ」

文字の切り替えが終わると、電子機器のインターフェイスのような、メニュー画面がカード表面に展開される。

それ自体も気になるが、まず星弥はカードそのものに興味を持った。

厚さ数ミリのプラスチックに近い、材質不明のカード。

電光のようなディスプレイを装備しており、文字を表示する機能がある。タッチパネルも搭載。

先程のメッセージを信じるならば、少なくとも二十四時間に一度は何らかの形で情報のやり取りをし、プレイヤー人数を知らせる通信システムもある。

そして、このインターフェイス、メニュー画面だ。

ボタンがいくつか並んでおり、上部には『Nyarlathotep System』の文字。

「ニャルラト、ホ……テップ……ナイアラトテップか？」

その下にあるのは、メニューの項目らしい六つのボタン。それぞれ英語で『Statu』、『Craft』、『Member』、『Dictionary』、『Option』、『Help』とあった。

「ステータス、クラフト、メンバー、ディクショナリ……？　まるでゲーム画面だな」

そう呟きながら、物は試しにと星弥はステータスのボタンをタッチする。

メニューパネルがスライドアウトし、次に画面として現れたのが、文字通りのステータス画面。

『名 前 日月 星弥 ひつぎ・せいや 17歳 / ♂
職 業 高校生・此咲学園高等部 このざきがくえんこうとうがく
能 力

【筋力 / D】 【知力 / C +】 【敏捷 / D】 【魔力 / -】 【C r f
t / D】

市内に存在する此咲学園高等部に通うただの学生。

知識は偏っているが、頭の回転は早い。しかし容姿とそれ以外は平凡である。

クラフトは顛帯観測。クラフトランクはD（まあ普通）。

『

……なんだこれ……俺のプロフィール……？

星弥の背筋に悪寒が走った。簡易的とはいえ、漏らした覚えのない個人情報カードに登録されているのだ。

しかもご丁寧に簡単な解説まで載っていて、これじゃあまるで本当にゲームか何かの登場人物のようである。

つか、容姿とそれ以外は平凡で。余計なお世話だったの。

そんな悪態を内心でつきつつ、ゲームが趣味の星弥は一気にカードへの興味がわきがって来る。

自身のパーソナルデータをそのままステータス化しているのか？

筋力とかの後ろに付いてる英字は間違いなく”ランク”だろう。

DやCは全体でみてどれぐらいなんだ？ 十はそのままプラス、

マイナーのランクごとの三段階分類か？ このクラフト顛帯観測っ

てのは？

……すぐに答えに行き着く。そうだ、ヘルプを見ればいい。先ほどのテキストでも、手紙にも参加証をみればわかると書いてあった。

ざっとステータス画面をみると、右上に四角で囲われた？のマークをみつけて、直感的にそれをタッチする。

予想通り、そこに画面の細かな説明が記載されていた。一般的なタッチディスプレイや、この手のインターフェイスに触れたことのある人間ならばそう困ることはなさそうだ。

星弥は無意識に笑みを浮かべながら、全ての画面を閲覧する事にした。

そうしてキッチンに座り込んでカードを参照し始め、三十分ほどしたところで星弥は我に返る。

時計を確認して、六時半過ぎであることを認識し、ため息を付いた。

「学校だ……」

ため息をついて、やれやれと立ち上がる。

とはいえ、今日は七月二十二日。終業式だ。明日から夏休みと考えると、気持ちはずいぶんと楽である。

だが、それをも上回る焦燥感が、爆発するほどの胸のふくらみが星弥にはあった。

バスルームへと向かい、鏡を見る。

鏡。

「なるほど……確かに、これは……は、はは！」

思わず笑いがこぼれ、星弥は左手でおさえた左目の辺りを、やわらかく撫でた。

その指の間から垣間見えた星弥の瞳は、菱形に変形し、不規則な速度で回転していた。

『ナイアーラトテップの微笑み』

ゲーム開始 一日目

01／日月星弥（前書き）

自分が魔法使いだったら、超能力者だったらと、夢描いたことはあるだろうか？

そんな奴は、ちょっと冷静になるんだ。

魔法が使えたとしても、世界も自分も、魔法のように変わるわけではない。

そりゃ、俺だって魔法が使えたら嬉しいと思う。

でも、魔法で夢は満たされても、腹も、財布も、未来も、きっと満たされはしないのだ。

……そう、俺は今まで、心のどこかで、そう諦めていた。

01／日月星弥

例えば、教室の中でも特に親しく話すメンバーが、放課後を利用して遊ぶでしょう。

普段から付き合いがあり、何かと一緒に行動していて、学校内で好きな奴を選べといわれたら選択肢に入るような、そんな彼らだ。そんな彼らが遊びに誘ってきても断るのが、日月星弥という少年であった。

この事を踏まえていうのも何だが、星弥は付き合いが悪いというわけではない。

彼らが食堂に誘えば食事についていくし、逆に誘うこともある。学校内での施設移動は大抵一緒に動いているし、何らかの班分けがあるとしたら、間違いなく星弥と彼らはグループとなって活動するだろう。

しかし逆にいえば、星弥とクラスメイト達は、そうして学内だけの関係であるともいえた。

特に忙しいわけではないし、前述した通り、彼にとってそのメンバーは好意的な対象であり、親しい間柄でもあるため嫌っているわけでもない。

だが、放課後の付き合いは徹底的なまでに悪いのが星弥であった。学校内では親しい間柄のクラスメイト達も、そうして月日が経つに連れて星弥を下校時に誘う事はなくなる。

かといって、クラスメイトとしての付き合いが無くなるわけではない。学校内ではいつものように、良好な関係が続く。

星弥は、環境ごとにきっぱりとコミュニティを分ける、ちょっと変わった考えの少年だった。

外見は一言でいえば絵にかいたような好青年。

美少年という度が過ぎてしまうが、一般的な感性の人間ならば一みみて悪い印象は抱かないだろう。

話好きでムードメーカー、たまに変な言動もあるが真面目だし面白い、とはある男子生徒談。

話していて楽しい、物言いがはっきりしていて、堂々としている、というのはある女子生徒談。

生活態度も良好、話していると聡明さを感じさせる、というのはある教師談。

特に勉強に励んではないが、授業は真面目に受けており成績も良好、学年単位では上の下程度には常にいる。

運動は不足気味で基礎体力や身体能力は人並み以下なものの、ゲーム形式のスポーツではそれなりにセンスを感じさせる。

学級委員長を中等部二年から今年の高等部二年まで連続して受け持っており、中学時代は生徒会経験もある。

素行の悪い生徒と正面からぶつかったり、教師に対しても自分が正しいと思ったら頑として譲らない、そんな人間性を評価した生活指導部の顧問が、密かに協力を仰いだりもしていた。

しかしそんな素行の悪い生徒やらぶつかった教師たちの一部とも付き合いがあり、誰とでも親しくなる才能がある、そんな人間。

それが日月星弥なのだろうと、学内で彼を知る人間は感じているだろう。

だから、本人は否定する。

話すのは確かに好きだが、その分、嘘八百を平然と並べたてる。

相手を笑わせるのは楽しいが、実は争いごとが大嫌いだから空気を良くすることに専念している。

男子生徒とはとにかく楽しく。

友達がいなのは詰まらないし、面白味のない学業の合間に遊べる相手がいるのはいいことだ。気が向けば外で遊びもする。

女子生徒とはなるべく穏便に。

異性は苦手だし、彼女を作る気もさらさら無いが、下手に触るとめんどくさい。だから波風立てず、いつも通りに自分らしく会話するだけ、機会があれば関わるだけ。

先生とは仲良くしておいて損は無い。

授業でわからない所があれば気軽に聞けるし、親しくなればいい意味で名前を覚えてもらえて、心証も良くなる。いざという時、味方になってくれるだろう。

だから、俺は人と仲良くするし、頭に来る物言いがあっても、あまり事は荒立てない。

それでも、腹が立つ事はある。

それを通じてたまに真正面から人とぶつかりあうが、これもまた正直に言うとは終わる度に心臓は破裂しそうになるし、その日の夜は眠れない時間を過ごすはめになる。

それから、授業態度は良い方がいいに決まっている。

真面目に授業を聞けばテストが出来る程度の記憶力はあると自覚しているし、何より真面目に授業を受けるだけで学校は生徒を評価してくれる。加えていえば、追試、補修、自宅での勉強など最悪の面倒事だ。

サッカーやバスケみたいな”ゲーム”は楽しいが、マラソンは最低最悪の運動だと信じて疑わない。ただ疲れる為だけに走るとはどいういう見なのか。同様の理由で、単純に身体能力を競う運動は不得手である。

学級委員長は定例会が面倒だが、自分の席を最前列右端に固定できるのが良い。一番前に座れるので授業を受けていてもうかつに眠れないから、怠け癖のある自分には良い刺激だ。

何より、教室からの出入りが最速である。手軽でいいし、先生達の見る目も良くなる。

誰とでも話す自信はある。でも、嫌いな奴とは話したくない。それに、知らないやつとも積極的には話さない。機会があれば話し、

親しくなっておく。交流は広く浅い方が、楽ができていい。

それが日月星弥であると、学内での自分を振り返り、星弥自身はそう自分を評価している。

別に自分が特別だと思った事はない。

心の中を露わにしていたら、他人とコミュニケーションなど出来はしないだろう。

誰だって、同じようにいろいろな事を考えて、それぞれが思い思いに生きているんだ。

……でも、だからこそ、心のどこかで常に思っていた。

——ここではないどこかへいきたい。

——いまではない非日常にありたい。

——自分ではない、誰かになりたい。

此咲学園というコミュニティから離れて彼がする事とはいえば、パソコン、ゲーム、アニメに映画、はては読書。

とにかくインドアなサブカルチャーへの着手であった。

彼はいわゆるオタクであり、もっと詳しくいうならば隠れオタクという存在である。

だが、彼自身がオタクと自らを名乗るかという点、それはない。

自分は本物とディープな会話はできない。

オタクというには知識が広いだけで深くはないと自覚している。かといって、それ以外にこれといった趣味はない。

学業は苦手ではないが可能ならばやりたくないし、と思えばゲームが極めて得意だとか、スポーツ万能だというわけでもなし。

ただ平坦に日常は過ぎていき、平凡なままに時は流れて行く。

惰性だ。惰性が惰性を積み重ねて、墮落した生活へと折り重なっ

ていく。

思春期の子供たちならば、誰もが願うだろう。
ある日突然、映画や小説のような、特別な何かがやってこないかと。

僕を、私を、夢の世界へ連れていってくれないかと。

星弥もそう願う一人であり、同時に、未だにそう願っている一人であった。

それでも、自ら行動を起こすほどの気力はない。高校生活にして一人暮らしをする星弥にそこまでのモチベーションは溢れてこない。だから、惰性のままに、墮生が続いていた。

……餌がほしくてたまらないのに、巢から絶対に動かない、ひな鳥。

そう、ひな鳥だった。俺はひな鳥だったのだ。

だが、今は違う。星弥はそう感じていた。

ひな鳥は、一生出られないはずの巢から飛び立つための、分不相応な翼を手に入れたのだから。

＊

通学用のバスから降りたところで、星弥はふう、とため息をつく。
壁壁壁壁壁壁壁壁壁壁。

眼の前には赤レンガの壁が広がっており、少し右手に大きな校門

がある。

門。

だが、あそこは大学生と教師用の正門だ。高等部の門は別の場所にある。

——市営私立、此咲大学付属総合学園。通称、此咲学園。
しえいわたくしりつ

この学園は小中高大と一貫性の学校であり、同じ敷地に全ての校舎や施設があるという大きな学園だ。

国内でも上位に位置する敷地面積を誇っており、学生数も五万人に達することから”学生の城”などと揶揄される事がある。

敷地は四角形で長大な赤レンガの壁に囲われており、東西南北それぞれに対応した学部の門が存在している。

星弥が向かう高等部は何らかの理由がなければ西門から入る決まりであり、西門から敷地内に入ってまっすぐ進むと、目の前に高等部校舎がある仕組みになっている。

そうしてちょうど田の字の十の部分に門と道があり、その中央周辺に校舎が揃っていて、中央部には巨大な総合グラウンドがある……といったわかりやすい作りがこの学園の特徴だ。

星弥はいつものように西門へと足を運びながら、辺りを見渡す。

学生学生学生教師。

学生学生学生学生。

学生学生学生……後藤忠則。

学生たちの波の中で、背の低い少年が一人振り向き、星弥と目が合う。

途端にその少年はぱあっと顔をほころばせて、星弥に駆け寄ってきた。

「おっす、日月！」

「おはよ、ごっ！　とう……」

ごっ、の部分で星弥は後藤に背中をバンと叩かれた。

「いやあ、清々しい朝だねえ日月。なんたって今日から夏休みだもんな！」

「だな。どうせなら先週の連休から休みにしてくればよかったんだけど」

「確かに。連休明けに数日授業やって夏休みっていうと、なんか焦らされてる気イするよなー。ま、それも今日までだけど」

「まあそりゃそうだけど、今日は授業何もねえし、気になるのは」

「宿題くらい」

「ですよね……昨日までもらったのだけでもありえねーって。感想文五枚とかなんなんだよってな」

学生学生壁壁。

学生教師壁壁。

「……？　なあ、日月。お前どうかしたのか？」

「え？　なにが？」

そこまで何気なく会話をしていた後藤が、訝しげに日月の顔を覗き込む。

「お前、左目どうかしたの？　痛いのか？　左手で抑えちゃって」

「え？　ああ、ちょっとな。バスの中で軽く眠ってる時にぶつかったみたいで」

「っははは！　バカクセー！」

「うっせえ！」

そうして日月が笑って肘でつくと、後藤は距離をとって走りだす。

「じゃ、俺放送部の方いくから！」

「おう、がんばれよー」

後藤。

左手を顔にあてながら、星弥は笑うように呟いた。

「……なるほど」

「なにがなるほどなの？」

「ふおあ！」

そんな動作をしていたせいか、背後からの声に後れを取る事になった。

左月菜月。

星弥が振り向いた先に立っていたのは、白いブラウスに赤いブレザー、それに仕様より短くしているスカート……つまるところ此咲学園の制服に身を包んだ少女。

「ってどこみてんだー」

「いたっ」

視線が揺らいでいた星弥の頭を小突くように、それでいて親しげに少女は笑うような声をあげる。

そうしてもらって、ようやく星弥は顔から手を離して、正面の少女を捉えた。

セミロングの髪から垣間見える表情は笑顔。少し童顔の愛らしい表情で、怒っている素振りもない彼女……左月は、やっとこちらを見た星弥に笑顔を振りまく。

「おはよ、日月君」

「ああ、おはよう、左月さん」

「で、なにが？」

「え？」

「なにがなるほどなの？」

「あー……俺、そんな事言ってたっけ？」
咄嗟にごまかす。

「えー。いったでしょー」

「いえ、全く記憶にございません」

「記憶にないのかー」

「はい、滅相もございません」

「へんなのー……あ、変なのはいつものことか」

「なにを？」

「えへへ、何も言ってますーん。記憶にないでーす」

そういつて笑いながら片手をふり、左月もまた星弥から駆けて離れていく。

どうやら友人の少女を見つけたらしい。その少女に駆け寄って声をかけて合流し、そのまま人並みに飲み込まれていく。

左月、学生。

「名前がわからない……知らない人間は全て学生で一括りか」
でも、面白い。異質だ。星弥は左手を顔に添えて、何度も何度も視線を泳がせた。

——結論から言おう。日月星弥は、超能力……”クラフト”を手に入れた。

今から二時間ほど前。参加証であるクラフトカード（星弥はそう呼ぶ事にした）を閲覧して確認できた事がいくつかあった。

自分のステータス、手に入れたクラフトのデータ、そしてそれらの見方である。

その中でも特に星弥が目を見張ったのは、やはり手に入れた力、クラフトであった。

星弥は件のカードを取り出し、クラフトの項目をタッチする。

『名称 顛帯観測てんたいかんそく』

種別 魔眼

能力 超能力型

RANK D（まあ普通）

【攻撃／G】 【防御／G】 【敏捷／G】 【魔力／C】 【視界／B
十】

スキル 《魔界視》 《身体強化…視力》

左目に発現する菱形の瞳。万物を理解しうる全知の魔眼である。

視界内に捉えた万物を所有者の理解しうる媒体で表示する。

捜査系能力としては王道の強力なクラフトだが、星弥の適正が低いのかランクはD。

能力の発現力が低く、発動時に左手で左目周辺に触れている必要がある。
『

顛帯観測。それが星弥のクラフトだった。

万物を理解する全知の魔眼。目で見たものを単純な情報として捉え、使用者に認識させる代物だと星弥は理解している。

ランクはD……分類でいうとまあ普通、とのことだ。

パーソナルデータやクラフトの【能力値】に表示されるランクには基本的に七段階あり、最高ランクをA、最低ランクがGとなっている。

＋（プラス）や－（マイナー）はランクを細分化したもので、A＋、A、A－、B＋……といったような序列の認識で間違いない。

つまり、Dとは真ん中も真ん中、ど真ん中である。

1ランクごとにどの程度の能力差があるのかはわからなかったが、少なくとも平凡なランクに位置するのは確かだ。

クラフトには名前、分類、ランクの他にクラフトの機能を明確に示す《スキル》と、概要となる解説が記述されていた。

スキルの欄に表示されていたスキルは二つあり、それぞれをタッチする事で詳細も確認が可能である。

『《魔界視》 RANK／C （そこそこ）

オールドと呼ばれる魔法の領域を視る。直感的に視界内の万物を理解、それらを使用者が知りうる媒体にして視認することが可能になる。

魔眼というカテゴリーではあるものの、脳そのものの処理能力を拡張する超能力分類のスキルであり、使用すると疲労が溜まりやすい。

日月星弥の場合、媒体は文字情報。本人が知識として内包する単語にのみ変換可能。

』

『《身体強化…視力》 RANK／B＋（いいね！）

身体能力を強化する。「カテゴリー…視力」は視力のみを強化。

効力はスキルランクとクラフトの魔力に影響される。

RANKB+は中々に優秀。

数百メートル先の苳でも表面のつぶつぶまで見ることが出来るだろう。ただし、星弥が魔眼を発動している時だけしか適用されない。

」

星弥は、ふと学園の外周へと視線を向ける。

此咲学園が存在するのは此咲市の中央区、此咲中央と呼ばれる地区だ。

特にこのあたりは地方都市である此咲市の中でも発展しており、それなりに高いビル群や繁華街、施設などが立ち並んでいる。

星弥が視線に捉えたのは、少し先に建つオフィスビル。階数にして十階あたりの箇所だろうか。

”ごく自然に”視界が拡大され、窓際で社員らしき男がタバコを吸っているのがわかる”。

窓窓窓。

「……見づらいな」

社員。

——バスの中でも何度か試したが、視力強化は左目の顛帯観測だけでなく、右目にも適用されている。

よって、右目では普通の景色を高性能の望遠鏡を使うかのように視認でき、左目では魔眼の機能を使う形になる。

だが、これがどうにも切り替えが難しい。理屈としては左目、右目をそれぞれ使う方だけ開けておけばいいのだが、意識せずに使うようになるまでには慣れが必要だろう。

それに……左目に宿ったクラフトの能力にもまだまだ疑問が残る。例えば今見ていた窓際の社員。これを文字情報として認識する時、窓をみると”窓”という文字情報が先に出てしまい、窓の向こうにいる社員が視認できないのだ。

星弥の顛帯観測は、あくまで物体を文字情報として認識する能力。窓、すなわちガラスなどの透過する物など関係なくひとつの物体

として捉えてしまおうらしい。

だが、そこから意識を外せば窓の向こうのものも認識が可能である。

ようするに、意識を向けないと認識できないって事か、などと星弥は結論づけつつ、また心が躍る。

楽しい。

楽しいと思わないか？

星弥は誰へのものでもない、その感情を内心で繰り返す。

未知の力を手に入れた自分。その未知の力を理解していく自分。誰も知らない、誰も経験したことがないであろうこの左目を徐々に理解し、自分のものとしていく快感。

すごい。すごすぎる。その一言に尽きる！

信じられない、未だに信じられない。だが、これは、まごうことなき現実なんだ！

「おい、日月！ もうすぐホームルームだぞ！ なにやってんだ！」

「え！？ あ、はい！ すみません先生！」

*

それから星弥は、様々な形で能力の”仕様”を確認した。

望遠鏡のようになった視界は遠くのものを見るのは得意だが、顕微鏡のように極小のものを見るのはできない事。

文字情報は基本的に一単語でしか表示できないらしく、あくまで名前という形の情報が得られない事。

無から有を生み出すような……例えば、問題集に書いてある数式を見ても、数式は数式であり、答えが出てくるわけではない事。

そして、使用しつづけていると長時間テレビをみたり、パソコンを使っていた時よりも遥かに鈍重な感覚に襲われるという事。

というか、襲われた。

終業式終了後のホームルームで、星弥はものの見事にダウンし、

教師に初めてどつかれた。

いわゆる真面目君で通っていた委員長の星弥だったものだから、これは少しばかり笑いの種にされるも、それ以外は特に収穫もなく学校は夏期休校へと突入していく。

そうしてHRが終わりそれぞれが思い思いに教室から出ていく中で、星弥は一つの問題に直面していた。

「……困ったな。どうやって勝てばいいのか」

何に勝つのか。

それはもちろん、この”ゲーム”の話である。

ゲーム……正式な名称がわからないので手紙にあった通り単にゲームと呼ぶが、このゲームは基本的にバトルロイヤル形式のものであるとみて間違いない。

勝利条件は、バトルロイヤルの名の通り、『あなた以外の参加者が全員失格となり、最後の一人となった場合』のみと手紙にはあった。

そして、失格の条件とは、参加証……クラフトカードが破壊されるか、リタイア宣言、もしくは参加を辞退せざるを得ない状況になった場合のみ。

「日月、じゃあまた始業式でなー」

「おう、またな斎藤」

星弥は不意にかけられた声にそう返し、荷物をまとめて席を立ち、昇降口へと向かうために教室を出る。

……クラフトカードを破壊する。つまり、相手が持っているカードを奪って、その上で壊すというわけだ。理屈の上ではシンプルで、わかりやすい。

だが、つまりそれが意味するのは間違いなく”戦闘”である。

ましてや、クラフトなどという力があるのだ。力で相手をねじ伏せるパワーゲームを選ばない方がおかしいと言えるだろう。

ヘルプを確認して改めてわかった事だが、星弥が舐めた飴、ラヴクラフトにも種類があり、味によりタイプが異なるとあった。

いちご味、メロン味、レモン味、ぶどう味、コーラ味の五種類は、それぞれ攻撃系、防御系、敏捷系、不思議系、特殊系となっているとヘルプにはある。

その中でも、特にいちご味。

これの攻撃系が意味するところは、星弥のクラフトの超常ぶりを見るに、間違いなく文字通り攻撃的な代物になるのだろう。

例えば炎を纏った剣。

例えば振ると突風を起こす扇子。

例えば放った矢が相手を追いかける弓……などと星弥は妄想する。

……無理だ……。

何が無理かというと、勝負になるかどうかの話である。

星弥の顛帯観測という魔眼は、確かに面白い能力だろう。

何の味かはわからなかったが、おそらくぶどう味かコーラ味により発現したものと見ていい。

『戦略に置いては情報が肝心』、などとどこかの小説か何かで軍師が言っていたが、それとは全く別のベクトルで、『戦術に置いては戦力こそが肝心』だろう。

……例えばの話、いま目の前に炎の突風を起こす弓使いが現れて参加証をよこせと言われたら、星弥は土下座してカードを差し出さざるをえない。

なにせ、対抗手段がないのだ。

情報をいくら手にした所で、それを実行するだけの戦力が星弥にはない。

実際問題、仮にこの目が相手の長所から短所、弱点までわかるような能力だった所で、相手がクマだったら、人間であり銃も持っていない一般人である星弥には勝ち目がないのだ。

それが、決定的な戦力差である。

まだこのゲームがどういうものなのか、実際にどれほどのレベルのクラフトが存在するのかわからないが、対策を練っておいて間違いない。

それこそ、最低限懷に刃物を忍ばせておくなり、スタンガンを持つていただけでも選択肢の幅はガラリと変わるだろう。

「……そういえば、まだ手紙の裏面を読んでないな」

確か、表の文末に裏面にはクラフトの解説が書いてある、みたいな事が書かれていたはずだ。

家に帰ったら読んでみるか。そう思いながらも、今日何度試したかもわからない顛帶観測の使用を試みる。

——思えば、この左手を左目周辺に添えなければ魔眼を使えない、という仕様。これは間違いなく弱点じゃないか。左手を抑えられたら終わる。もしも事故で怪我して骨折なりしたら、それこそその場でリタイアするしかないだろう。

星弥は目を走らせる。

廊下。だめだ。

床。アバウトすぎる。もっと全体を捉えられるようにならなければ。

窓学生学生学生壁。

昇降口へと向かう学生の波に紛れながら、星弥は学生の二文字の大海に溺れていた。

どこを見ても学生の二文字ばかり。

学生学生学生、学生学生学生学生学生学生学生学生学生学生学生
学生プレイヤー学生学生学生……。

「……？」

一瞬、目を疑った。

左手を離して、その違和感の先にある存在を凝視する。

背後からみたその姿は、どこにでもいる男子生徒だ。

背は低めで160少しといったところか。上履きの色が赤なので、高等部の一年生である事がわかる。

左手を添えて、彼を確認する。

プレイヤー。

学生ではない。

プレイヤーと表示されている。

プレイヤーとはなんだ？

いや、内心に聞くまでもないだろう。そうとしか考えられない。

あいつ、”ゲーム”のプレイヤーなのか……！？

星弥は思考を巡らせる。他に何かプレイヤーに該当する単語はなかったか。

だがしかし、テニスプレイヤーだの、プレイボーイだの、本来プレイヤーという単語は何かにつけ加えられて成り立つ単語だ。

文字情報で万物を示す顛帯観測がプレイヤーという単語で星弥に理解を促すのならば、直近のプレイヤーはただ一つ。このゲームに参加しているプレイヤーしかない。

「これは……」

星弥は人知れず鳥肌を立てた。

侮っていた。何を侮っていたのか、自らのクラフト、顛帯観測を

まさか他のプレイヤーをその場で認識できる能力があるとは。しかも視界強化も合わせれば、最大射程は数百メートルにも及ぶという。

これは素晴らしいアドバンテージだ。おそらく他のプレイヤー……特に戦闘に特化したクラフト能力にはない、戦略的な意味での情報収集源となるはずである。

あとは、この力でプレイヤーを特定した後に、クラフトカードを奪取し破壊するための戦力さえ整えば……。

そんな思考の矢先、件の男子生徒は人混みに消える。

まずい。下駄箱か。星弥は慌てて人を押し分けて進み、靴を履いて外に出た。

波のように流れてくる学生たちを前に、目立たない位置に立ってあの学生を探す。

……みつけた。これだけ学生の二文字が流れてくる中で、プレイヤーというカタカナ四文字は逆に見つけやすかった。

「どうする。つけるか……？」

「なにをつけるの？」

「……っ！！」

正真正銘、心臓を掴まれたかと星弥は思った。

驚き振り返ると、目の前には立つのはまたもや左月菜月。デジャヴかと疑うも、左目でも左月菜月を視認している。

「？ またその反応かぁ。……ところで、顔どうかしたの？ 朝からそんな感じだけど」

「え？ あ？ ああいや、別に……」

星弥は左手を離しながらも、ちらちらと背後の男子生徒を見る。

……幸運にも、昇降口の出先で友人らしき少年と話している。それにひと安心したところで、視線を左月へと向けると、ややふてくされたような表情になっていた。

幼稚園児が怒っている時の顔だ。星弥はそう思った。

「またー、朝もそうやって挙動不審だったでしょ」

「ええ？ いや、そんな事はないと思うけど……」

というか、むしろ一日の間に二回も左月と巡り合ったことの方が星弥にとっては驚きだ。

こうして親しげに話をするが、別段深い交流もなく、お互いに校内での顔見知りといった程度の仲、というのが星弥の認識である。

「そんなんじゃないよ？ 話を聞かない男子とかサイアクだね」

「ああ、そうだな、悪い。ちょっと朝から考え事しててさ」

「考え事……？ 何か悩みでもあるの？ 進路とか？」

「まあ、んなところかな」

適当に誤魔化す。

「ふーん。よかったら相談に乗ろっか？ カラオケで」

「カラオケでかよ！ って、いや、え、カラオケ？ どゆこと。誘ってんの？」

「うん、そう！ 今から他の子たちとカラオケいくんだけど、一緒

にどう？」

……そうして目配せをする左月の方を観ると、四人ほどの女子生徒がたむろして、こちらを見ていた。

星弥と目線が合うなり、きゃっきゃと何かを話し始める。

女子ばっかじゃねえか、冗談じゃねえ。

「女子ばっかじゃねえか、冗談じゃねえ」

「うわ、ひど……。今日は友達の知り合いの男子たち誘うはずだったんだけど、自分たちだけでどっかいつちゃったみたいなんだよね」

「いや、ていうかそれならそれで俺の事もスルーしてくれよ……。

そのまま女子会でいいだろ、一人だけ男混じってどーすんだ」

「まあ、それはそうなんだけど……」

……またも向こうの女子生徒たちに目配せをする左月。首を横に振る仕草を見ると、向こうで女子たちが何やら手をわさわさと動かしている。

こいつら何やってんだ。星弥はそう思いながらも、ふと意識の外にいきかけていた例の男子生徒を見た。

——なんというタイミングだろうか。まさに今友人に別れを告げ、歩き出すプレイヤーの男子生徒。

星弥はそうそうに話を切る算段をつけて、矢継ぎ早に左月にまくし立てる。

「ていうか、俺もこれからダチの方に合流するんだわ。委員長だから先生に捕まってちよつと出遅れてるんだけどさ」

「あ……そうなんだ」

「いや、こっちこそごめんな。まあまたなんか機会があったら言ってくれ。それじゃあな！」

「え、あ、ちよつとー！」

背後で何か左月がいかけていたが、それどころではない。

思わぬ邪魔が入って考えがまとまらなかったが、とりあえずできるだけの監視はしておこう。

幸いにも、こちらには”眼”がある。常に左手を顔に添えておくのは不審だが、相手に気づかれさえしなければいいのだから、十数メートルの距離感で素人が尾行するよりも、百メートル以上離れた場所から眼で追う方が安全だろう。

曲がり角などには対応できないだろうからもう少し距離は縮まるだろうが、まず気づかれないはずだ。

……西門を出た男子生徒は、正門前までくるがバスには乗らず、そのまま歩き出す。

徒歩での通学である事に今回は感謝しつつ、星弥は遠くを歩き進む男子生徒の尾行を開始した。

02／ゲーム

星弥の始めた尾行は、予想していたよりも遥かに楽なものになった。

学園近辺は下校ラッシュでとにかく学生が多い。その中で一人の生徒を追うことになったわけだが、顛帯観測を駆使すればさほど難しい事ではなかった。

……とはいえ、顛帯観測も連続で使用すれば疲労する。

学校では眠気に襲われる程度の疲労感で済んだが、これ以上続けると気絶するのかもしれない。常に左手を顔にそえておくわけにはいかないだろう。

そこで、周囲に学生がいる内はそれに紛れて歩く方針に変え、確認程度に魔眼を使いその男子生徒の尾行を続けた。

その後も黙々と追跡は続く。

夏休み入りたてという事もあり、周辺は学生だらけだ。

木を隠すなら森の中というが、この状況ではわざわざ隠れるまでもなく星弥は周囲に溶け込んでしまっている。

特に此咲市では此咲学園が最も大きい教育機関というのもあり、辺りにいる学生はほとんどが此学このがくの生徒である。

油断するとあつという間に相手を見失いかねないので想定よりも距離をつめるハメになったが、逆にこちらの視線にも気づかれる事もまずないだろう。

……いや、小説やマンガの読み過ぎか、と星弥は改める。

視線を感じて振り返る、などという事は一般人はしない……というか、よほど勘がよくてもありえないだろう。

俺は素人だが、相手も学生、素人のはずだ。何らかの拍子でバレル事はあっても、こちらの意図を察知して、などという事はほばないだろう。

そうして尾行した男子生徒の動向は、ごくごくありふれたものだった。

学園を出てからはまず繁華街へと向かい、本屋に寄ってマンガ雑誌を立ち読み。ジャンプ。

次にゲームセンターに入って音ゲーを少々。下手だった。

それからゲーセンで顔見知りらしい少年たちと少し喋った後に、此咲中央を外れて、住宅が密集する西此咲へ。

……ここまで来ると、流石に学生が減ってくる。各々がそれぞれの家に戻っていくのだから、自然と人通りがまばらになってくるのだ。

”探偵ごっこ”もここまでか。百メートルほど離れた場所から男子生徒を確認しながら、星弥は追跡を打ち切る事を考え始めた。

その時だった。

突然、電子音が鳴り響く。警報のような音で、とにかく大きい。

一瞬驚いて周辺を見渡した星弥だったが、すぐにそれが前方にいる男子生徒から発せられているのがわかった。

咄嗟に目の前にあった曲がり角の壁に隠れて、頭帯観測を使う。

——男子生徒は音に一瞬うろたえるも、右手で内ポケットを漁り、懐から何か……クラフトカードを取り出して、確認する。

うまいことに、星弥の位置からはカードに表示された内容を確認する事が出来た。

その一文を見て、星弥の心臓が跳ねる。

『ホルダーとエンカウントしました。』

なんだ？ ホルダー？ エンカウント？ ホルダーというのはプレイヤーのことか？ カードにはそんな機能があるのか？！
今すぐにでも逃げ出したい気持ちに包まれる……だが、膝が笑ってうまく動かない。

それに、逃げ出そうものならその場で見つかってしまうかもしれない。どうする……どうする！？

男子生徒が、その場で構えをとる。

……？ その場で、構えた？ ということは、つまり、そこに……。

——小柄な男子生徒が身構える先に立つのは、私服姿の男性だった。

歳は三十代ぐらいだろうか。男は無造作に立っていて、男子生徒はやや身を低くして後ずさる。

その雰囲気は、少なくとも知り合いと出会った、などという生やさしい代物ではなかった。

星弥はそこでようやく体が動くようになり、やや震える手でクラフトカードを取り出す。

……カードは、朝みたままのインターフェイスを表示し続けている。

そうだ。もしもあれがカードの機能なのならば、エンカウントした瞬間に俺のカードも警報がなくなっておかしい。

なら、楽観的にいくならば俺はまだ”アイツら”に発見されていない。むしろ、遭遇して対峙しているのは……。

……男が左手にあるカードを肩の上までもってきて、見せびらかすように振る。

それは間違いなく、クラフトカードだった……なら、間違いなく……。

「……くそ、バカか俺は。あの男を左目で見れば……!」

右目ばかり使っていた自分に焦りを感じつつも、左目で確認する。プレイヤー。

間違いない、既にわかってしまった事ではあったが、あの男もプレイヤーだ。ということはつまり、

「ゲームが、始まるのか……?」

消え入るような声で、星弥はそうつぶやいた。

次の瞬間、二人に変化が現れる。

まず、少年の右手に何かが現れた……いや、それは、刀だ。

どこからだった? どうみても、瞬きの合間にいきなり出現した。

日本刀。なんてわかりやすい武器だろうか。一目みた瞬間、殺傷武器のそれであるとわかるデザインだ。

そして、その一瞬後に男へと目をうつした時、男もまた武器を手に行っていた。

こちらは……ハンドガン……リボルバー? これもかなりシンプルなデザインで、西部劇からそのまま出てきたかのようなものである。

そうして両者が各々に武器を取り出し、思い思いに構える。

——にやり、と笑みを浮かべたのは男だった。

星弥は男の笑みの理由を理解している。

銃。発射されればその瞬間、当たり前さえすれば男の勝ちがほぼ決まるであろう、現代でも屈指の威力を持つ武器だ。

対して少年が手にもつのは刀。確かに切れ味はいいだろうし、斬られれば一溜りもないだろうが、そもそもそんな余裕があるかどうかどうかも怪しい。

加えて、少年が後ずさったせいで結果的に銃をもつ男しか射程に捉えていないというのも致命的だ。

イニシアチブは確実に男にある。少年の勝ち目は見るからに薄い。発砲された瞬間、体のどこかに命中すれば、その瞬間に少年は崩

れ落ち、問答無用のまま蜂の巣にされるだろう。

少年に勝機があるとすれば、相手が撃つ前に動き出し、外れることを願いながら接近するしか――

次の瞬間、男が引き金を引いた。

鋼鉄の銃身が吠える。勝負は決したと星弥は悟った。耳に突き刺さるような乾いた音が響いた瞬間、銃弾は少年の目の前に

接近したところを、真実、少年の刀に”切り伏せられた”。

コンクリートに穴をあける銃弾。男はその現実を理解できていなかった。

理解できないまま、最初からそのつもりであったのだろう、立て続けに残りの弾も撃つ。

二発目、三発目、四発目……ことごとく切って捨てられる。信じられない刀さばきで、銃弾を落とす。

冗談ぬきで、マンガのような光景だった。

――六発目。当然のように少年はそれを退け、男の銃は弾切れをおこす。

まだ立っている少年を見て、男は首をかしげた。

少年が肉薄する。目の前まで少年が迫り、男は理解した。銃弾は、カスリ傷一つさえ、この少年に与えられなかったのだと……。

「う、うわ――アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

悲鳴があがる。この角度からでは見えなかったが、少年は迷うことなく刀を振り下ろしていた。

男が倒れる。その姿を、少年は刀を振り落とした姿勢で、微動だにせず見届けていた。

……一瞬だった。

一瞬で、勝負が決まった。

いや、むしろ現実はこのようなり取りが行われたとしたら、こ
うもあつけないものなのか？

……何いってんだ。現実には？　このような？　正真正銘、これは
現実だ！

悪い夢なら覚めてくれ、なんて言葉すらでない！

……起こった事実のみで考えよう。

クラフトと思われる銃と刀による戦闘が起きた。

銃が勝つと思ったが、少年の刀が銃弾をはたき落とし、勝利した。
そして、男は……。

「……？」

いや、まて。

様子がおかしい。

崩れ落ちた男が動き出した。よく見ればコンクリートに血が飛び
散った後もない……斬られたんじゃないのか？

少年の先ほどの一閃は脅しだったのか？

星弥は右目を凝らし、足元を見る。

黒い煙……いや、塵か？　そんなものが風に流され消えていく。

その発生源は、クラフトカードだ。

——クラフトカードを、斬ったのか。

先ほど、男は安易にカードを取り出してちらつかせていた。そこ
から銃をすぐに出して戦闘になったのだから、しまっている暇など
なかったのだろう。

もしかしたら、あの男が最初の脱落者になったのかもしれない。

「とにかく、ここを離れないと……」

居ても立ってもいられなかった。

とにかくその場から離れたい一心で、星弥は慎重に、かつ素早く
住宅街を駆け抜けた。

背後から先ほどの少年が追ってこないか？

曲がり角の先で新たなプレイヤーと遭遇しないか？

遠距離から狙撃銃のようなものですでに狙われているんじゃないのか？

様々な恐怖心に包まれて、駆けて駆けて、バスに乗ってから入る客出る客を確認して。

そうしてようやく、星弥は自室のあるアパート”ネオロマンス”にたどり着いた。

＊

星弥は自室に飛び込んで鍵を閉め、上がりこむなりコップに水を注いであおぐ。

砂漠のようになっていた口の中、喉、体の内が潤い、冷やされ、満たされていく。

「……っ、はああああ……」

星弥はようやく、そこで一息をつく事が出来た。

帰り道は、とにかく恐怖心に包まれていた。

見えない敵。

見えない攻撃。

見えない恐怖心。

一人でお化け屋敷を進む子供のように、星弥はただ震えながらここまで帰って来た。

心のなかの星弥が叫ぶ。

……こんな事でどうする。あんなすごい出来事を前にして、ただ

ビビってるだけなのか、俺は。

心のなかの星弥が言う。

だが、実際問題として、今後しばらくはバス等の公共車両は使えないだろう。バスの中でプレイヤーと出くわす、なんてのは死んでもゴメンだ。学校でさえ怪しい。

心のなかの星弥が嘆く。

もう無理だ。辞退した方がいいんじゃないか。なんだあのふざけたサムライは。勝てるわけがない。外出だってしないほうがいい。今すぐ引きこもるべきだ。

「……ふううう……」

震える口で、息を吐く。

落ち着け、落ち着け。

気分転換にと、見もしないテレビをつける。バラエティを垂れ流し、音楽プレイヤーが好きなバンド、レインボーリボルヴの曲を大音量でローテーションしていく。

それでも落ち着かず、部屋中の全ての電気をつけ、ニコ動で笑える動画を見て、何か口に含もうとしたが、買い出しを忘れていたのを思い出した。

……午後七時。星弥は体の震えを静めるのに、実に一時間を要した。

だが、震えはおさまり、星弥は落ち着きを取り戻す。

大丈夫だ。ここには敵はいない。”まだ”ここは安全だ。

……ここに来て始めて、星弥は事の大きさを認識し始めた。

領域が指定されていない——おそらくは此咲市丸々一つなのだろうが——場所でのオープンワールド的なバトルロイヤル。

これは詰まるところ、いつ何時に敵と遭遇するかもわからない、かなりのサバイバル性、ゲリラ性をもったルールだ。

プレイヤーの数は少なく、此咲市の総人口は十一万人。出会う確率は限りなく低い……だが、出会う。今日、あの場所に、プレイヤーが三人揃ってしまったように。

……プレイヤーは全部で何人だったか。そう考えた所で、星弥は手紙の件、またエンカウントに関する件も思い出した。

立ち上がり、勉強机の引き出しにしまっておった手紙を取り出す。

『ナイアールラトテップに微笑まれたあなたへ』。

その一文を数秒見つめてから、星弥は裏面を読み始める事にした。そこには、今日遭遇した出来事の理解に足る様々な要素が書かれていた。

『さて、表面の最後に書いたとおり、ここではクラフトに関する解説を行います。

それに関して、まず前述した飴、ラヴクラフトについて説明せねばなりません。

さあ、耳かっぱじってよく聞いて下さい！

この飴玉、ラヴクラフトは奇跡のお菓子！

単刀直入に申しましょう！

なんと、舐めるだけで超能力が使えるようになります！

はい、わー！ ぱちぱちぱちー！

……はい、ええ。手紙で言い表さなくてはならないくらいね、ここで大抵の読み手が死んだ魚のような目をするのはわかっておりますのでね、はい。

いえ、そのサラリーマンの男性、大丈夫です。別に毒じゃありません。

その怖いおまわりさん、落ち着いて下さい、いけないオクスリじゃないんです。合法です。

あと君、その中学二年生の男子生徒！

そう、君！ 正解！ 大正解だよセンター2君！

君のご想像通り、これは不思議な力で作られた不思議な飴で、不思議なことに舐めると不思議な効用で不思議な力が不思議と湧いてきて不思議とあっさり手に入っちゃうとっても不思議なものなんだ不思議！

……いやね、こればっかりは舐めてもらうしかないんです。

だからこそ、参加条件に『飴を舐めること』が入っているのです。おわかりいただけたでしょうか？ 決して、痛い注射で泣く子供を誤魔化す為のアイテムなんかじゃないんです。

まあ、ここで舐めてもらわなければこのゲーム的にはどうしようもないので、舐めてもらう事を前提で話を進めていきましょう。

それに、舐めてクラフトを手に入れた後なら、願いが叶うゲームだという事も、多少は信じてくれるでしょうしね。

……さて、皆さんに配られたそのラヴクラフトには、五種類の味があります。

勘のいい方はおわかりになられるでしょう。そうです、飴の種類により、手に入れられる能力の分類が異なるのです。

こればかりは天運、天命、定め、運命と書いてデステイニー。ナイアールラトトップに微笑まれたあなたにおかれましては、あなたの好みのラヴクラフトが手元にあることを勝利の女神にお祈りして

おきましよう。

まあ、こまかい事は参加証で説明されるので、ここでは概要をぱっぱと書き連ねてしましましょう。

ぶっちゃけめんどくさい、そんな人は別に読まなくても問題ないです。

ぱぱっとスルーしちゃって下さい。

◆
【五種類のラヴクラフトによる能力の違いとは？】

ラヴクラフトは舐めるだけで超能力を手に行ける不思議なお菓子！では、どのような力を手に入れられるのか？ それは味により異なっているのです。それが、以下の五つ。

いちご味…赤いいちご味は弾ける攻撃系！圧倒的な力で敵を打ち負かしましょう！

メロン味…緑のメロン味はがっちり防御系！身を守る術をもって負けない戦いのサポートをします！

レモン味…黄色のレモンはびゅんびゅんスピード系！そのスピードはどのような状況でも活躍するはず！

ぶどう味…紫ぶどうはしっとり不思議系！いちご、メロン、レモンにはないあれやこれで相手を出し抜きましょう！

◆
コーラ味…唯一無二のコーラ味は特殊な飴！何が起るかわからない！当たれば天国、はずれりゃ地獄！

◆
【ラヴクラフトにより目覚める力、クラフト！】
ラヴクラフトで手に入れられる超能力のことを、私どもは『クラフト』と呼んでいます。

クラフトは、大きく五種類に分類されますが、その姿形は様々です。

舐めた人間の内面に大きく影響を受け、五つの系統の方向性を維持しながらも、その特色の多くをラヴクラフトを舐めた能力者『ホルダー』にゆだねます。

ラヴクラフトは、あなた方ホルダーから内包する三つの因子『フアクター』を取り込み、クラフトとしての能力を生み出すのです。能力の使い方に関しては、参加証をご覧ください。そこに浮かび上がるものが、あなたの現在の力なのです！

◆-----◆
【敵プレイヤーはどうやって見つけるの？】

ゲームの舞台は丸々この街一つとなっています。

では、そこからどうやって数十人、いや一人、二人と敵を見つけるのか？

答えは簡単、参加証を見るだけ！いや、これが本当なんです。見ればわかります。

具体的には、二つの遭遇方法があります。

《エンカウント》

エンカウントは受動的な発見システム。近づいてきた敵ホルダーとの遭遇を知らせる警報機です。

クラフトを入手し、ホルダーとなった参加者たちが半径30メートル以内に入ると、「エンカウント」状態となります。

この状態ではホルダーにのみ聞こえる警報音がおおよそ半径100メートル圏内に響き渡り、周辺のホルダー達にエンカウントを知らせます。

一般人には聞こえず、突発的ですが確実に作動する、安心の危険察知システムです。

ただし、エンカウントにはクールタイムがあり、三分に一度しか鳴りません。三分以内に別のプレイヤーに遭遇すると警報は鳴らな

いのでご注意下さい。

《ホルダーサーチ》

ホルダーサーチは能動的な探知システム。周辺のホルダーの位置を確認し、その方角を知る事ができます。

「ホルダーサーチ」は参加証によって使用でき、基本的に手に持ってサーチと念じるだけで使用が可能です。

そうすると、射程500メートル程の扇状のレーダー波のようなものを出します。目には見えないし、音にも聞こえません。

そのレーダー波がホルダーに接触すると、その瞬間に使用したホルダーの参加証に知らせが届きます（相手には一切わかりません）。参加証には、反応があった場所までの距離、方角が表示されるので、これを駆使してホルダーを探しましょう。

ただし、こちらのホルダーサーチにもクールタイムがあり、十五分に一度と連続使用には向きません。慎重に、かつ大胆に使用しましょう。

【どうやって戦うの？】

では、クラフトを用いてどうやって戦うのか？

これも答えは簡単。問答無用のバトルロイヤル！ サバイバルと言ってもいいでしょう。

その能力を駆使した方法ならば、どんなやり方でもOK！あとは参加証を壊してしまうか、相手をリタイアさせるだけ！

能力は多種多様ゆえにこれといった例はあげられませんが、しいて言うならば『クラフトを使っていれば問題はない』ということですよ！

実際のゲーム中は、クラフト同士による他の格闘技やスポーツでは味わえない爽快感溢れる戦いをお楽しみになれますが、相手もクラフトをもっている、ということをお忘れなく。

【参加証はどうやって壊すの？】

手に入れてもらった参加証を見ていただければわかりますが、クラフトという法外な力があれば、簡単に破れたり潰れたり燃えたりバラバラに引き裂かれたりします。

しかし、逆に言えば参加証は『クラフト以外の力では壊せません』。これは絶対です。ミサイルでもムリです。

参加証の破壊により対戦相手をリタイアさせる場合には、クラフトの力をご利用ください。

参加証をご覧になればわかりますが、参加証は常に危険に晒される立場であり、最強の切り札である事をどうかお忘れなく。

【最後に】

他にも細かな質問等があるかもしれませんが、それらに関してはあえて情報を伏せています。

ですが、基本的にこのゲームではこちらが想定している反則、失格等の行為は原則できないようになっていて、事を自信をもって断言させて頂きます。

なので、最後にこれから戦うあなたへアドバイスをして締めくくりとさせてもらいましょう。

【あなたへのアドバイス】

参加者の中には、自分に強い劣等感を抱く人、天才には勝てないと思っている人、自分は強いから必ず勝てると思いこんでいる人など、様々な方がいるに違いありません。

手に入れたクラフトの力が不満だったり、強すぎてビビっちゃったり、弱すぎてチビっちゃったりしている方もいるでしょう。

しかしクラフトは、そのような人間、クラフト間の能力差を埋める糧にもなれば、逆に差を広げてしまうものでもあるのです。

どんな宝も使い方。

どれだけ強い武器だろうとお猿さんには使いこなせないように、

人間としての知恵、発想、そして勇氣やら愛やら根性やらが最終的には力となるのです。

ですので、最後にこの言葉を送りましょう。

「クラフトは、想いを糧にする力です」

では、これを手に取ったあなたがゲームに参加し、そして勝利者として最後に立っておられることを祈っております。

無貌の神が、勝利者となったあなたに微笑みますように。』

「……なにが無貌の神だ」

ぼやきながらも、星弥は手紙の内容を噛み砕いた。

飴はプレイヤー……いや、ホルダーの持つ”ファクター”とやらに影響され、五系統の中でも更に能力は細分化される。

敵ホルダーの探索、察知の為に、エンカウント、ホルダーサーチというシステムがある。

クラフトカードはクラフト能力でしか破壊できない。

……重要なのはこんなところだろうか。

「だけど、クラフトカードが常に危険に晒される、というのはどういう意味だ……？」

最強の切り札とは？

確かに、エンカウントにサーチ、データライブラリも搭載されているし、ゲームの生命線なのだから切り札といえそうなのだろうが。

なんとなしに、次はクラフトカードを見る。

すると、メニュー画面に変化があった。

メンバーとディクショナリの項目に小さく『New!』とポップアップがついているのである。

メンバーは、今まで全くデータが入っていなかった項目だった。データベースらしいもので、空欄しかなかった事とその項目名から察するに、メンバーというユーザーの存在を記入するものなのだろうとは考えていた。

デイクシヨナリはヘルプをデータベース化したようなもので、文字通りの用語辞典である。

まずデイクシヨナリを確認してみたところ、そこに改めて『エンカウント』『ホルダーサーチ』といった単語が追加されていた。

「まじかよ……」

思わずそう漏らす。まさか手紙を読まないから更新されなかったとでもいうのか。今時説明書を読まないといけないツールなんて不便すぎる。

……愚痴りながらも、一応追加された単語を確認してから、星弥は次にメンバーの項目をチェックした。

「――！」

メンバーには、新しく二つの情報が追加されていた。

男性ホルダーA。

少年ホルダーA。

それぞれをチェックする。

『名前 男性ホルダーA ?? 歳／♂

職業 不明

能力 ※推定値

【筋力／D】 【知力／?】 【敏捷／G】 【魔力／?】 【C r f t
／F】

星弥が少年ホルダーAを尾行している際に少年ホルダーAと戦闘になったホルダー。

銃タイプのパワー系クラフトらしきものを所有していたが、少年ホルダーAに敗れる。

敏捷性の無さは確認できたが、それ以外はよくわからない。クラフトもランクF（残念）だろうが、リタイアしたので関係ない。』

『名前 少年ホルダーB 16歳／♂
職業 高校生・此咲学園高等部
能力 ※推定値
このざきがくえんこうどうぶ

【筋力／C】 【知力／？】 【敏捷／B】 【魔力／？】 【C r f t
／C】

市内に存在する此咲学園高等部に通う学生ホルダー。星弥が偶然発見した。

超反射的な身体能力と日本刀型のパワー系クラフトを持つと思われる。

クラフトランクはおそらくC （そこそこ）以上。まだ本気を出しきってはいないだろう。』

「出会った事のあるホルダーの情報が載るのか……」

だが、推定値とか、おそらくとか、曖昧な部分が多い。能力値も不明になっている項がある。

どうやって更新しているのかはわからないが、おそらくは自分で見た情報から組み立てられる予測データなのだろう、と星弥は考えた。

名前の部分にリンクがあり、タッチすると画像が出る。しかし少年ホルダーAとして出た画像は、星弥が見慣れた後ろ姿だけだった。これだけの情報ではどうにもならない。どうにもならないが……情報を集める事はできる、か。

推定値とはいえ、何度か観察すればこのデータはより正確なものに書き換わるのかもしれない。なら、こうして偵察を繰り返せば……

…。

「……繰り返して、どうなる」

冷静さを取り戻して、改めて実感した。

——このゲーム、俺のクラフトに勝機はないんじゃないか。

朝から疑問に感じていたことだが、一日目にして、その結論に至る。

万物を理解する目はあくまで情報収集のための力だ。だというのに、このゲームは『相手のクラフトカードを奪い、破壊する』のが勝利条件に繋がる。

なら、俺はどうすればいい。顛倒観測をもって、何をすればいい。できるわけがない。どう考えても無理だろう。

……刃物片手に襲ってくる程度の相手ならずいぶんとマシだと星弥は思った。

だが、例えばあの少年は違う。

銃弾を刀でたたき落としてしまうような奴相手に、俺は何ができる？

星弥はただ意気消沈するばかりだった。”面白いおもちゃ”を手に入れた、その程度だった認識の甘さが露呈し、泥のようなコーヒ―が降り注ぐ。

——あなたへのアドバイス。

ふと、手紙をとり、先程読んだばかりの文章の、最後の項目を見る。

——参加者の中には、自分に強い劣等感を抱く人、天才には勝てないと思っている人、自分は強いから必ず勝てると思いきこんでいる人など、様々な方がいるに違いません。

——手に入れたクラフトの力が不満だったり、強すぎてビビっちゃったり、弱すぎてチビツちゃったりしている方もいるでしょう。

——しかしクラフトは、そのような人間間、クラフト間の能力差を埋める糧にもなれば、逆に差を広げてしまうものでもあるのです。

「……どんな宝も使い方、か」
だが、どう使う？

——クラフトは、想いを糧にする力です。

想いを糧にする。それはもしかしたら、重要なキーワードなのではないか？

例えば……例えばの話だが、ものすごく気合を入れてクラフトを使えば、能力が上がったり、新しい力が手に入ったり……。

「……そう簡単にはいかない、よな」

仮にそうだとしても、そんな意識した気合の入れ方でどうにかなると思えない。

よく小説の中で主人公が愛や怒りの末にパワーアップを果たすが、あれは物語の主人公だからこそなせる技だ。

そんじょそこらの一般人程度の気力では、とてもじゃないがあのようにはいかないだろう。

なら、どうする。

「……考えるしか、ないか」

……クラフトカードは、クラフトによってしか破壊できない。このルールがある以上、どんなクラフトであれ、必ず”参加証を破壊する手段”があるはずだ。

まずは、それを見つけないければ……。

——みつけてどうする——。

「……ああ、くそ！」

思考の迷路から逃げるように飛び上がり、星弥は財布を開いてク

ラフトカードをしまい、ついでに中身を確認した。

何か食べよう。財布の中に金はあるが、今からではデパートにいても閉店時間になってしまう。

なら、コンビニか。そう結論付けて、星弥は制服もそのままに財布をポケットに突っ込んで外へ出た。

夏も本番に近づきつつある夜は、蒸せるような潮風がやってくる。……此咲市が海に面しているせいもあるが、高温多湿が苦手な星弥は、首元のボタンをゆるめながらドアを閉め、鍵がかかったのを確認して道路へと足を踏み出す。

けたたましい警報が鳴り響いた。

耳をつんざくような電子音。それでいて人間の警戒心を煽るような異音。

星弥は、ポケットに手を突っ込んだまま三秒動かなかった……。いや、動けなかった。

ゆっくりと。ゆっくりと、財布を取り出し、カードを確認する。

『ホルダーとエンカウントしました。』

星弥は、視線を上げる。

――”彼”は、正面に佇んでいた。

星弥がアパートを出た所から30メートル前後の距離だろう。

まっすぐに見据えられる場所、街灯の下に、彼はいた。

星弥は思い出していた。

ここまで誰から逃れるように逃げてきたのか。

誰の脅威に怯えていたのか。

そう、それは、彼だ。

彼という存在そのものが、星弥にとっての、ゲームへの最初の恐怖心だった。

……少年ホルダーA。

未だ名前も素性もわからぬ少年が、ゆつくりと、星弥に向けて一歩を踏み出した。

「あ、あ……」

完全に、思考が焼け落ちた。

終わった。ここまでか。そんな言葉が脳裏をよぎり、飲み込まれる事もなく霧散していく。

……視線の先にある人影。少年ホルダーA。その存在その一挙一投足を、星弥は噛み締めるように見入る。

そうして思考停止していた星弥の耳に、不意に声が届く。

「日月先輩、ですよね？」

「……!？」

歩み寄ってくる少年。

素性もわからない敵を前にして動けずにいた星弥の思考を再起動させたのは、日月先輩、という名指しであった。

……アパートの出先、突然の遭遇。目の前に現れた”敵”に名前を呼ばれ、星弥は混乱に陥る。

狼狽える星弥を意に介さず、少年は言葉が続ける。

「あれ、でもさっきエンカウントは……いや、でも先輩の方が鳴ってるもんな……ってことはやっぱり先輩、ホルダー、ですよね？」

「……! いや、ま、待て! 話を……!」

咄嗟に口を衝いて出た言葉がそれだった。

とにかく、いきなり斬り込まれればおしまいだ。なんとか時間を稼いで……いや、稼いでどうする!？ 逃げられるのか?! どうやって!？

すさまじい勢いで回りだした思考の中で、星弥はとにかく逃げ延びる事だけを考えて。

しかし、その考えをも打ち消すように、その混乱の元凶であるは

ず少年が笑ったようにして肩をすくめる。

「っはは！先輩もそんな風にビビるんですね。中学の生徒会にいた時はそんな感じはしなかったんですけど」

「な……え、生徒、会？」

少年は言葉が続ける。言葉が続けるという事は、少なくとも今は戦う気はないという事だ。

それとも、完全になめられているのか……いや、そんな事より、まずこいつに聞くべきことがあるだろう。

「お前、俺を知ってるのか……？」

歩み寄ってくる少年の顔が、アパートに設置されたライトで徐々にあらわになる。

小柄な少年の顔立ちは、体格に似合った愛らしいものだった。少し太めのまゆが印象的な少年の顔に星弥は少しだけ見憶えを感じるが、はつきりとは思いつけない。

目の前まできても答えを見出せない星弥に呆れたのか、ふう、と一息ついた少年が苦笑して答えた。

「忘れちゃいました？　ってまあ無理もないか。……オレ、佐藤です。佐藤、一。^{はじめ}先輩が生徒会を引退する一月前くらいに生徒会に入ったんですけど」

「……………佐藤？」

微かな記憶に楔が打たれ、その思い出が浮上してくる。

「ほら、新選組がどうのこうのって」

「……あ」

——なんかお前、あれだな。新選組みたいな名前だな。

——いっそ斎藤だったらカッコ良かったんですけどね苗字がハンパに庶民的で……。

「佐藤一、佐藤か！　いや、覚えてる！　名前を聞いて、俺が新選組みたいな名前だって言って話しかけた！」

「思い出しましたか」

頬をぽりぽりと搔いて、少年……佐藤は笑う。

そうだ、この笑顔が絶えない少年を、俺は知っている。

星弥は、忘れていたとはいえかつての知り合いだった事に安堵し、同時にそんな相手に気づかずにさんざんつけ回っていた事を恥じた。

「いや、忘れられてたらどうしようかと思いましたよ」

そう言って佐藤は手をすっと星弥に差し出す。

同時に、冷たい鉄の感触が星弥の首筋にあてられた。

「……え？」

「ああ、すみません。動かないで下さいね、先輩。オレ、この状態から手首のスナップだけで、あなたの首きれるんで」

一瞬、握手か何かだと思った星弥は、全神経を首筋に集中させた。刀だ。佐藤が手を伸ばした瞬間、すでに手の中に刀があり、刃が首筋に置かれていた。

あまりに自然な動作で、あまりに唐突な出来事で……。

いや、唐突ではない。忘れたいと、その可能性はないと、知った名前だと思った瞬間に、そう逃避しただけだった。

「……おい、嘘だろ……」

ついで出た言葉はそれだけだった。”貼り付いたような”笑顔のまま、佐藤が続ける。

「口答えはなしで。あんまり先輩にはこういう事したくないんですけど、なるべくオレの質問に答えて下さいね。オレが指示しない限りは、イエスカノーで。オーケー？」

「……イエス」

「さすがです。今もきつと頭いいんでしょうね、日月先輩」

ニコツと佐藤が、笑顔を上塗りするように笑った。

「じゃあ、まずは第一の質問。ホルダー、ゲーム、クラフトという言葉に聞き覚えはある？」

「イエス」

「なるほど、じゃあ参加者で確定ですね。次、今日オレのこと尾け

てたの、先輩ですよね？」

「……！」

心臓がはねる音を、星弥は生まれて初めて耳で聞いた。

気づかれていた……相手は素人だと高を括っていた星弥は、内心で自分の頭をハンマーで殴る。

何が素人同士、ばれはしないだ。見事にバレバレじゃないか……！
「……？ 答えは？」

佐藤に促され、星弥は我に返る。

「い、イエス。だけど、あれは」

「言い訳もなし」

「………」

「まあ、別に尾行したのに怒ってるわけじゃないんです。気づいた上で色々ぶらついてたのはオレでしたし。それに、最初の方はマジで尾行されてるのわからなかったんで、気づいてからは結構楽しかったです」

「………」

「次。これは具体的にお願いします。あなたのクラフト能力は？」

「……クラフト能力……」

思わず、オウム返しになる。

クラフト能力を教えろ。それはつまり、敵に情報を与えるという事だ。

どうする。素直に言っているのか？ いや、まずい。こちらに戦

闘能力がないのがバレてしまう。

なら、嘘をつくか……？

それがバレない保証は？

「クラフト能力、言えませんか？」

「……仮に俺がそれを説明したとして、お前はそれが本当かどうかわかるのか？」

「ええ、わかります」

再び心臓がはねる。

「——って言ったら、どうします？」

言葉をかみ殺すように笑う佐藤。その笑いに応じて、星弥の首筋にあてられた凶器もまた、かすかにわらう。

「あなたが嘘を言ってるかどうか」、「それを」オレがわかるかどうか」、「日月先輩にわかるんですか？」イエスかノーで」

「……ノー」

「その言葉はまあ信じるとして、そうやってイタチごっこじみた裏の裏を探っても意味ないって事です。現に、オレがその気になれば先輩はこの場でクビ飛ぶんですよ？　なら、オレは先輩が誠意をこめた対応をする方にかけてます。先輩は、”あたまいい”ですから」

「……なるほどな、わかった。俺の参加証の画面を見せよう」

口頭説明よりも、最も確実な方法だろうと星弥はそう提案する。

「いえ、それじゃダメです」

「？　だめ？」

「ああ、先輩は……ってまだ一目だもんな、そりゃそうか。あーまー、オレは確認したんでわかってるんですけど、他人のカードって画面の内容が見えないんですよ」

……？

「そうなのか？」

「はい、そうなんです」

本当にそうだったか？　星弥の中で疑問が生じる。

——それはすぐに確信に変わる。そんなはずはないと星弥は内心で否定する。

少なくとも、今日の尾行の際には佐藤のクラフトカードを星弥は盗み見る事ができた。だからこそ、エンカウントの存在を察知できたんだ。

それが出来たという事は、星弥は他者のクラフトカードを見る事が出来たのに、佐藤は出来なかった、という事になる。

「はい、じゃあさっさとクラフト能力、説明してください」

「……！ わ、わかった……」

疑問を追求する余裕を、佐藤は与えてくれなかった。とにかく、今は佐藤の言う事に従うしか無い。

どの道、佐藤の気が変われば一瞬でお陀仏だ。なんとか、この場を凌がなければどうにもならない。

「……俺のクラフトは顛帯観測。カテゴリーは魔眼だ。目で見たものを単語一つで確認する事ができる。それが何か俺がわからなくても、言葉そのものを知っていればそれとして視認する事ができるんだ。それと、数百メートル先まで望遠鏡のように遠くのものを見れる」

「へえ、面白い能力ですね。飴はぶどう味でしたか？」

「すまん、よく確認せずに舐めた上に飲み込んでしまって、味は覚えてないんだ……ほ、本当だッ！！」

味は覚えていない、のくだりで首筋に刃の腹が食い込んできて、慌てて星弥はそう叫ぶ。

「……………まあ、クラフト能力を説明して、わざわざ味を隠す理由も特にないですしね。それはいいでしょう。それで、他には？」

「……他につてのは？」

「いや、だからその”天体観測”ですよ。目からビームが出るとか、そういうのは無いんですか？」

目からビームって……何いってんだこいつは。

「そんなアメコミみたいな能力はない。本当にこれだけだ……本当だぞ？」

ずっと、佐藤の笑みが消えて行くのがわかり、星弥は念を押した。こればかりは信じてもらうしか無い。……というより、ここまで言っただけで確信に至っていないという事は、おそらく佐藤には心を読むような力はないのだろう。

クラフトカードに記載されていたデータにもパワー系ではないかとの推測があった。

おそらく、こいつの能力は戦闘に特化しているはずだ。

「でも……それじゃあ先輩、このゲームどうやって戦う気なんですか？ 参加証、破壊できませんよね？ ホルダーの方を殺すんですか？」

「な、殺すって、お前」

「あれ、知りませんでした？ ホルダーが死んでもリタイアになるんですよ、このゲーム」

「……！！」

「あ、ホントに知らなかったんだ。手紙読みませんでした？ 『こちらが想定している反則・違反はできない』みたいな記述。逆に言えば、殺せるんだから……反則じゃないですよね？」

「……試した、のか？」

「ああ、先輩は見てなかったのか。オレがさっき、対戦相手に”なにをしたのか”」

——どうかしてる。

星弥は目の前の佐藤一という存在に対して、何度も何度も修正を加える。

一日目にしてこの周到さはなんなんだ？ 対戦相手になにをした？ つまりそれは、ころしたということか？

ころせるのか？ そんなかんたんに？ あっさりと！

「殺したのか？」

沸々とわいてきた感情を、星弥は抑えきる事ができなかった。

「顔も見られましたし、逆恨みでつけねらわれても迷惑ですよね」

「そんな理由で！ 簡単に……！」

星弥の首筋にあてられた刃が、改めて刃の側を星弥へと向ける。

だが、ついてでた言葉は止まらない。

「なんで……お前、このゲームが何かわかってるのか？ 本当に願いが叶うって信じたのか？ だから殺したのか！？ お前頭おかしいんじゃないのか！ あんな手紙一枚で、あっさりと、殺したとか！ 殺すとか！」

それは、怒りではない。

正義感でも、ない。

純粹な、疑問だった。

手紙を受け取った時点ではにわかに信じられず、ラヴクラフトを舐めてクラフトを手に入れた今でも、半ば夢のような、この現実。

星弥が求めたのは、謝罪でも、反省でもなく、解答だった。

はつきりいって、星弥にはまだ実感がなかった。

超常的な力を使い、お互いの参加証を狙い……あまつさえ、命すら奪っても構わないゲーム？

そんなもの、実在しているのか？

いや、確かにそれは実在しているのだろう。だが、実感がない。

星弥には実感がなかった。

誰が敵で、誰がそうでないのか。誰が主催者で、なぜこんなゲームをするのか。

それこそ、一度参加者を一箇所に集めて、自己紹介をさせてほしいくらいだった。

だから、今現実として、後輩の少年に日本刀をつきつけられている……その実感が、希薄なのだ。

——本来なら、星弥は刃物を突きつけられ、平然としていられるような少年ではない。

彼が高等部一年だった時に、いわゆる不良たちとトラブルになった時も、毅然とした態度をもちながらも彼は最後まで体の震えが止まらなかった。

終わってみれば、教師の前で泣き始めてもいた。

……彼を優秀で聡明な男だと評価する人間がいるが、それは間違いだと、もうわかっていいるだろう。

彼は臆病で、常にどこかで算段を立てていて、感情の奔流を抑え切れない、そんな、ただの少年なのだ。

「……百億」

「……!？」

不意に、佐藤がそう呟き、星弥は感情が収まらぬまま、その言葉

に耳を傾ける。

「前回の優勝者が獲得した金額です。人としての夢を叶える……それ相応の金額だと思いませんか？」

「ひゃく、おく……？」

反芻する星弥の首筋から、ふいに金属の感触が消える。

佐藤の手から、いつのまにか刀は消えていた。

「……ま、先輩の言うことが本当ならそのクラフト能力は今のところ無害……か。いいでしょう、話しますよ。”前回のゲーム”について」

佐藤は手に持ったクラフトカードを見つめながら、そうして星弥を促した。

＊

コンビニで弁当を買ってから、星弥は佐藤を自室に招き入れた。つい先ほどまで刃物を突きつけていた相手と行動を共にするのは気が引けたものの、”前回のゲーム”というキーワードへの好奇心がそれを抑えつける。

……室内に入ってからすぐに行われたのは、二人揃ってのホルダーサーチだった。

「じゃあ、先輩はオレに背中を向けて。これでほぼ全周囲を調べられますから。頭の中でサーチとだけ念じて下さい」

「あ、ああ」

そうして佐藤と背中合わせに立ち、星弥は念じる。

——サーチ。

瞬間、太陽光を浴びたかのような熱が手元で発生し、それが前方へと広がっていくのを感じた。

クラフトカードの画面が起動して、サーチ中という文字が現れる。

それからしばらくして、電子音と共に『ホルダー反応はありませんでした』という記述が現れた。

「どうです、先輩」

「反応なし」

「こっちもです。それじゃあ、改めてお邪魔しますね」

そう言って、ベッド脇の小さいテーブルの前に佐藤は座り、星弥は電子レンジで弁当を温めてから、佐藤の対面に座った。

「……前回のゲームの優勝者は、俺の叔父でした」

星弥が座り込むなり、佐藤は話を切り出した。それ無言で耳にしながら、星弥は緑茶のペットボトルをあけて飲む。

——丁度中学に入る頃です。両親を事故で失ったオレは、叔父の資金援助を受けながら生活をしていました。

僅か一代で巨万の富を築いた富豪。親戚の間でも叔父の事は有名で、親戚中どこを見渡しても、叔父の足元にすら届くような人はいなかった。

親戚の叔母はよく彼について裏では汚い事をしていたに違いない、とオレに言ってはいましたが、引き取り手がいないとわかった途端に手のひらを返して叔父の事を褒め始めたのを覚えています。

そうして叔父の所へ行くことになったオレでしたが、実際の所、彼がしてくれたのは身元の保証と資金援助だけで、あとは勝手に暮らせと使用人づてに伝えただけ。

忙しい人なんだろうとは思ってましたが、まあ、冷たいと思いましたね。

それでもガキだったもんですから、名作劇場の悲劇の主人公……ちよつとそんなのを想像してました。

まあでも、毎月子供相手にその辺のサラリーマンより大きい額を渡してくる存在でしたから、オレとしてはそれでいいかなって部分はありました。

幸い、オレは金に溺れるタイプじゃなかったし、変にすれてる所

があつたんで、遊び呆けたり無駄遣いしたりって事はなく……まあ贅沢はしましたが、普通にやってきました。

「それが、つい先月までの話です。本題はここからです」

「その叔父が持ってた金ってのが、ゲームの賞金だったって事だろ？」

星弥は弁当の蓋をあける。ほかほか温まった焼豚と麦飯の香りがふわっと広がり、鼻腔をくすぐる。

「はい、そうです。でも、叔父は先月自殺しました」

「自殺……？」

話が飛躍して、星弥は思わず聞き返す。

「会社の経営が悪化して、借金まみれになったらしいです。事実上の倒産ですね。叔父とはその時はじめて……ってわけじゃないですが、それに近い状態で出会いました。叔父は抜け殻のようになってましたが、そこで、オレにゲームの話をしてくれたんです」

——上を向いても頂上が見えないような高層ビルの一室にオレは呼び出されました。

叔父の会社が倒産したという事は聞いてましたが、オレとしてはその時は、これからどうやって暮らせばいいかで頭がいっぱいだったんです。

なので、叔父と会った時はその事について話してくれると思っていました。

そうして、叔父が話し始めたのは未来の話でした。

「……一ヶ月後、お前の暮らしている此咲市で、”ゲーム”が開かれる」

「ゲーム？」

「わたしがかつて優勝したゲームだ。わたしはその賞金として百億の金をもらい、それを元手に会社をたてた」

「……えっと……」

「信じられないのも無理はない。だが、聞け。わたしは、”お前を選んだんだ”」

叔父はオレ達以外にも何人か身寄りのない子供を養っていて、一番ゲームに向いていそうな子供にだけこの話をする、という話があったそうです。

そして、話を受けた子供の所には必ず招待状が届き、ゲームに参加する権利が与えられる、とも。

にわかには信じられない話でしたが、叔父は色々とゲームについて話してくれました。

「あれは、ゲームなんてのは名ばかりの、殺し合いのようなものだった。だが、優勝者には莫大な力が与えられる。わたしもそうして力を得た。わたしが勝てたのは偶然だったが……それでも、あの場でわたしはいきのこり、こうして今日まで生きてきた」

「……そのゲームってのは、いったいなんなんですか？ 誰がそんな事を？」

「わからん……だが、かなり大規模な組織……それこそ、国家レベルでのプロジェクトであってもおかしくはないだろう」

「国家って……そんな、まさか」

「わたしだって信じたくはないさ。だが、ゲームに付随して現れる様々な技術、この世のものとは思えない現象、完全に整備された街一つ分のゲームフィールド。全てが現実で、全てが非現実的な光景だった。……もしもあれが国の仕業ではないのなら……」

「――神か、悪魔の所業だと。そう言っていました」

「……なるほど、それでお前は妙に手際が良いっていうか……」

「いや、でも実際にこうしてゲームが始まってみて、叔父の助言はほとんど役に立ちませんでした」

「そうなのか？」

「ええ。叔父から聞いたものから、インターフェースも大分変わってて。叔父の代では参加証はカードではなく、PDAのような携帯

機器だったようです」

「神様だか悪魔様だか知らないが、そいつらも進歩してるってことか……」

星弥は改めて、ポケットからカードを取り出した。

妙に重量感のある、薄い一枚のカード。そうして佐藤の話を聞いてから見るそれは、国家の陰謀が見え隠れするような気もした。

「このクラフトカードも、確かに国家レベルの技術で作られたもの、っていわれると確かにそれっぽくなってくるよな」

「……？ クラフトカード？」

「え？ ああ、俺が勝手にそう呼んでるだけだ。ただ参加証っていうものなんだかな」

「まあ、確かにそうですね。……オレ個人としては、いや、叔父がそう呼んでいただけなんです、こいつの事はネクロノミコンと呼んでいます」

「ネクロノミコン？」

どこかで聞いたことがあるような名前だ。星弥は自分の記憶を探り、それがRPGか何かに登場した名前である事を思い出していた。「ネクロノミコンっていうのは、クトゥルフ神話に出てくる……いわゆる魔導書っていうか、そういう感じのもの、らしいです」

「クトゥルフ神話……？ そういう伝説があるのか？」

「ええ。まあ正確には創作物で、元はハワード・フィリップス・ラヴクラフトっていう小説家を書いていた作品群を、友人らが手直しして作ったものらしいですけど」

ハワード・フィリップス……ラヴクラフト？

「……ラヴクラフト。もしかして、その神話ってのがこのゲームの？」

「はい、モチーフで間違いありません。招待状として届いた手紙にあるナイアラーラトテップというのも、そのクトゥルフ神話に登場する神の名前です」

「……ちよっと調べてみていいか？」

「はい」

ベッド脇に追いやられていたノートパソコンを取り出して、星弥はクトゥルフ神話について調べた。

佐藤の説明の通り、クトゥルフ神話は、小説家『ハワード・フィリップス・ラヴクラフト』の小説の世界観を、ラヴクラフトの友人オーガスト・ダーレスたちがその後書き継ぎ、体系化されていた架空の神話の事らしい。

そのクトゥルフ神話に登場する異形の神、それがナイアーラトテップ。

神のメッセンジャー。

無貌の神。

狂気と混乱をもたらす存在。

「あんまり良い神じゃないな」

「ええ。まあ、このゲームがクトゥルフのネーミングを流用しているにしても、悪趣味ですよね」

「ラヴクラフト、ナイアーラトテップ……それに、ネクロノミコンか。確かにそう考えると、クラフトカードって呼び方よりはそっちのがらしいな」

まあ、ぶっちゃけ会話の中で使うのは恥ずかしい。星弥はそう思いながらも、口には出さない。

……口にしたら、その場で切り捨てられるかもしれないな。バツサリと。

今更ながら、随分と佐藤に心を許してしまっているじゃないか。

そんな自分に気づいて、星弥は少しだけ自虐的になった。

「……叔父は、ナイアーラトテップの破滅がやってきたんだと言っています」

「ナイアーラトテップの、破滅？」

「ナイアーラトテップは、この世に混沌と死がやってくる先触れで、そいつに力を与えられたものは、必ずといっていいほど破滅の道を辿るっていうのがその神話での”お約束”らしくて」

「……ああ、それはまた」

随分とした皮肉だ。巨万の富を手に入れながらも、次のゲームが始まるという時に破産して全てを失う。

確かにそれは、ナイアーラトテップがもたらした破滅と捉えても遜色はないだろう。

「でも、オレはそうは思いません」

「……というと？」

「仮に、の話ですが。もしも、本当に叔父に対して、破滅をもたらす存在がいたとしたら……？」

「……？ 実際にナイアーラトテップって神がいるってことか？」

「いえ、そうじゃなくて……。だから、もしも国がこのゲームに関わっているのだとしたら、ゲーム開催に先駆けて、意図的に叔父の会社を……潰したとしたら」

「……！」

背筋に寒気が走った。

神の天罰だとか、ナイアーラトテップの呪いだとか、そんな小説の中の話では言い表せない、ほんの少しだけリアリティに歩み寄った説。

「つまり、ゲームの主催者は佐藤の叔父に金を与えておいて、最終的には潰すつもりでいたって事か……？」

「あくまで、オレの推測です」

「だけど、実際にその小説のナイアーラトテップって神が実在するとか、そういう話よりは遥かに現実的だ」

「ええ。あくまでそれに比べれば、ですけど」

……………。

少しの沈黙が訪れて、星弥はいつの間にか食べ終わっていた豚焼肉弁当をキッチンで片付け、戻ってくる。

「……それじゃあ、どうしてお前はゲームに参加したんだ？」

星弥は、戻ってきて、ベッドに腰を下ろしながらそう尋ねた。

「……………端的な話、叔父がゲームに勝利したのは二十年前の話。」

つまり、仮に勝利したとして、もしも最終的に死ぬような事になっても、少なくとも二十年は保証されている、と踏んだから」

「……そんな無茶苦茶な」

「冗談ですよ」

「……………」

ははっと笑う佐藤に、若干星弥はイラッときた。

「どうしても、叶えたい夢があるからです。ただそれだけの為に参加しました」

「その夢ってのは？」

「言うほどのものじゃありません。人としての、ありきたりな夢です」

そう言いながら、佐藤はゆっくりと立ち上がる。

「……日月先輩。あなたにはありますか。夢」

夢。

その言葉が、妙に室内に残留した。

「……夢……」

「オレには叶えたい夢があります。二十年かけても、五十年かけてもかなわないかもしれない夢がある。だから、オレは叔父の言葉を信じてゲームを待ち望み、そして、今日という日が来ました」

叶えたい、夢。

「先輩、あなたのクラフトに戦闘能力がないのはわかりました。……先輩ならもうそのつもりだとは思いますが、戦いには参加しないんですよね？」

「……いや、それは……」

……確かにここまでの話を聞いて、星弥はゲームを続行する気力が薄れてきていた。

純然たる事実として、戦闘能力のないクラフト。

これだけでも実際のクラフトカード争奪戦は不利だ。それに加えて……。

星弥は、佐藤を見る。

こいつの夢。それが何かはわからないが、それを乗り越えてなお叶えたいような夢が、俺にはあるか……？

「……どの道、そんな弱々しいクラフトじゃあ敵と正面切って戦うのは無理です。ホルダーサーチをしながら日々怯えるくらいなら、その気になったらすぐにリタイアしてください。わかりましたね？」
「……………」

星弥は、答えられなかった。

それは、佐藤が星弥の身を案じての発言だったと、なんとなく星弥は悟った。

だからこそ、言葉にできなかった。

言葉にも、感情にもならないなにかが胸の中で渦巻いて、もやもやとしたものが心を締め付ける。

「……先輩なら、”あたまがいい”から、わかるはずです。それじゃあ、オレはこれで」

そうして、佐藤はリビングから消え、玄海へと消えて行く。

「……先輩。次に出会った時は、オレはあなたを斬りますよ」

そんな言葉を残して、ドアの閉まる音と共に佐藤は出ていった。

それから星弥は、ベッドに横になって、ただ天井を見つめ続けた。

このゲームで何ができるのか。

このゲームで何をするのか。

このゲームで、俺は何者になるのか。

何者でもない、ただ日月星弥であるがまだ。即座に心のどこかで星弥が答える。

でも、クラフト能力は、今までの俺じゃない。俺ではない何かを与えてくれる気がする。都合のいい発想はやめろ。

夢なんてない。夢なんてないけど、それを探すためにこの戦いに参加するのもいいかもしれない。主人公気取りか、日月星弥。

もっと素直になれ。日月星弥が言う。

お前はただ、楽しみたいだけだろう？

クラフトっていうおもちゃを与えられて、今日一日夢中になっていた、ただの子供だろう？

夢は終わりだ。

おもちゃは、別の子供が持ち歩いていたもつとすごいおもちゃを前にして、色あせ、錆び付き、陳腐なものになったんだ。

だから、もうそのおもちゃは捨てろ。

そうするべきだ。

恥ずかしいだけだ。

命に関わる。

逃げろ。

逃げたほうがいい。

逃げたい。

勝てるわけがない。

勝てない。

勝つ気がないだけだろ。

怖いじゃないか。

そうやって怖がってるから、お前は日月星弥のままなんだ。

そんな事はわかってる。

ああ、わかってる。

だけど、人間はそう簡単に、変われはしない。

だけど、人間はそう簡単に、変われはしない。

——強烈な電子音を耳にして、星弥はベッドから飛び上がった。

「!?!? なんだ?!」

いつのまにか寝ていたのか？

いや、それよりも、今の電子音は

!?!? エンカウントか?!

背筋が凍る思いで、星弥はクラフトカードを確認する。

『一日目が終了しました。経過報告を開始します。▽』

……メッセージを確認して、少し力が抜ける。

そういえば、日付変更線と共に報告がある、という記述が手紙にあったな、と星弥は思い出していた。

時計を見る。丁度日付が変わったところで、その推測が正しいことを裏付ける。

『今日の一言…一日目は静寂の日、二日目は嵐前の日。今日は事が動き出すかもしれません。▽』

……………。

『二日目を迎えたプレイヤーは二十人。一日目のリタイアは三名となりました。▽』

三人……か。

これが少ないのか、多いのか、星弥には判別がつかない。

『リタイアされた方のお名前、リタイア原因は以下のとおりです。▽』

そんな発表があるのか？ 晒し者じゃないか。

『【すずきなおゆき さま】

ホルダーと戦い、名誉の戦死を遂げました。

自信満々で挑み、真正面から切り伏せられる、素晴らしい活躍で

したね』

……これは、佐藤が戦ったあのホルダーのことか？
戦死……佐藤が斬ったんだったな。

『【ひのまさこ　さま】

ホルダーの襲撃を受け、気づく間もなくリタイアとなりました。
タイムセールスの誘惑に負けず、慎重に動くべきでしたね。』

……はは。なんだこりゃ。本当にただの晒し者じゃないか。
すずきなおゆき……鈴木直之か？　そいつはまだ死んだだけ恥を
知らないから……マシ、ってわけじゃないな。
乾いた笑いが室内に響く中、星弥はメッセージを送る。

『【さとうはじめ　さま】

ホルダーと戦い、名誉の戦死を遂げました。
最終撃破人数…一名
初戦に勝利した戦果と共に、若きサムライ、ここに眠る。』

「……………え？」

星弥の口から、知らず、そんな声が漏れた。
震える手が、意図せずにメッセージを送ってしまう。

『それでは、ゲームは二日目へと突入します。
残りの参加者の皆様に、ナイアーラトテップの微笑みがあります

ように▽』

クラフトカードは、それを三秒だけ表示して、元のメニュー画面へと戻る。

……時刻は、七月二十三日。午前零時三分。

夏のうだるような湿気に促され、星弥は一滴の汗を落とした。

『ナイアーラトテップの微笑み』

ゲーム続行 二日目

昼前に起床した星弥は、ニュースで佐藤が死んだことを知った。

『被害者の佐藤一さんは、西此咲の公園で、全身を刃物で刺され血を流して倒れているところを通行人に発見され、病院に搬送されましたが、間もなく死亡が確認されました』

ニュースでは詳しいことはわからなかった。

一度全国放送のニュースで確認したあと、地方チャンネルのニュースでもそれを確認したが、内容は変わらない。

地面にこびりついた黒い血痕の映像と、第一発見者らしい近所の住人の証言が流れる。

『そうなんですよー。朝起きたら公園に人が倒れてて、あたり一面真っ赤でー』

……テレビを消す。

腹が減って、星弥は冷蔵庫を開けた。中には昨日……。買ってきたおにぎりが入っていたので、それを食べる。

ペットボトルの茶で米とシーチキンを流し込み、一息ついて、パソコンの電源を入れた。

馴染みの検索エンジンを使って、ググる。

ニュースサイトで同様の事件を調べる。そこにあった記事も同じような内容で、まだそこまで情報が開示されていない事だけ確認できた。

次に総合掲示板に行き、キーワードで検索する。

ニュース速報のトップクスは立っていたが、ニュースに対して怖い、マジキチ、だのといった感想がつけられているだけだった。

頭を掻く。

ため息をついて、またテレビをつける。

ニュース番組が終わり、真昼のバラエティがチャンネルを占拠していた。

頭を掻く、掻く、掻く。

ドアの前までいって、郵便物を確認する。電気料金の請求はがきがきていた。

ガシガシ。

水道の締め方がゆるかったようで、蛇口から水がぽたぽたとこぼれていた。しめる。

ガシガシ。

なんでだ。

落ち着かない。

なんで落ち着かない……！

星弥は焦燥感に似たものを覚え、何度も何度も室内を往復した。

——オレには叶えたい夢があります。

なんでだ。

——二十年かけても、五十年かけても、かなわないかもしれない夢がある。

落ち着かない。

——だから、オレは叔父の言葉を信じてゲームを待ち望み、そして、今日という日が来ました。

「……なんで、なんで死んでんだよ。バカじゃねえのか……」

それが、星弥の率直な思いだった。

落ち着かないのは、佐藤と話したのがさっきの事のように思い出せるから。

落ち着かないのは、まだ佐藤が死んだという事実を認めたくない自分がいるから。

落ち着かないのは、佐藤が、こんなにもあっさりと……なんで、

死んで……。

死んだのは、ゲームに負けたからに決まってる。……納得できない。

この世は弱肉強食、上には上がいるという事だ。……できるわけがない。

刃物を突きつけられた時には恐怖を刻み込まれた。……だけど。見ず知らずの男を殺したと言った時には怒りすら覚えた。……今は。

今は……日をおいて改めて思い返した佐藤一は、かつて後輩だった少年だ。

再会した時こそよく思い出せなかったし、ほんのわずかの間ではあったが、親しげに話しかけられた記憶がおぼろげながらに蘇る。

今更というのはあまりに手遅れなほどに、星弥は佐藤一を思い出している。

——佐藤の、事の顛末を知りたい。そう思い、星弥は考えた。

「……学校、に聞くか。そうすれば、家の住所くらいは」

星弥はそう思い立ち、携帯で学校に連絡を入れた。

自分の学籍と名前を告げ、担任の山中を呼び出してもらい、佐藤一の自宅住所について聞く。

……山中は嫌そうな反応をしていた。

マスコミが何人か佐藤一に関して電話してきているらしく、その事を星弥に愚痴る。

それでも山中は住所と連絡先を確認してくれ、星弥に教えてくれた。個人情報をお口頭で教えてしまうのもどうかとは思いますが、有事だし日頃の行いもあるしな、と山中が付け加えたので、星弥は愛想笑いをしてから礼を述べて電話を切った。

そうして手に入れた住所は意外にも近く、徒歩で二十分もしないところにある一軒家だった。

佐藤の自宅に連絡してみると、親戚の叔母を名乗る人物が電話に出る。

朝から準備をしていて、今日通夜を行うという事だったので、星弥はそれに合わせて佐藤の家へ足を運ぶ事になった。

……制服でよかったよな。付け焼刃の知識で準備をし制服に身を包んだ星弥は、そうして目的地である家の前までやってくる。

途中、通夜の案内をする人を見つけて会釈をしながら進んだ先では、予想以上に人が集まっていた。

佐藤の自宅は結構大きなものだった。家そのものも二階建てながらに立派な代物だが、家の敷地と同じ広さの庭があり、そこに通夜の参列者たちが集まっている。

星弥はその集団を見つめながら、静かにクラフトカードを取り出し、ホルダーサーチを仕掛けた。

『ホルダー反応はありませんでした』

「……………ふう」

小さく息を吐いて、星弥は敷地内へと足を踏み出した。

全く、嫌になる。星弥はそう思いながらも、ホルダーサーチを欠かす事はできない。

部屋を出る前にも進路上に対して一度。その後大体の到着時間を計算して、着いてすぐにサーチが出来るようにここまでやってきた。

……当たり前といえば、当たり前だ。佐藤は十中八九、ゲームで殺されたんだ。

人が死んでいる……なら、俺も死ぬかもしれない。

だから、死にたくないなら、入念にサーチを繰り返すしか無い。

敷地内へと星弥は入った。

中では親族であろう大人たちがちらほらと見られたが、制服を着た……つまるところ此高の生徒が大多数を占めていた。

泣いている生徒や顔見知りで集まっている集団を避けて進み、星弥は受付と香典の受け渡しを済ませる。

「この度は御愁傷さまです」

一言二言、受け付けの人間と言葉をかわしてから、星弥は踵を返した。

どうやら会場となるのは一階の広いリビングのようで、特に親しい人達が席に着いているがわかる。

……あの席に着く気は星弥にはなかった。

晴れているのもあってか、屋根付きのテントの下に参列者用の席があったので、星弥はそこへと足を運ぶ。

「え、じゃあここって佐藤君の自宅ってわけじゃないの？」

不意に湧いてきた言葉に足を止め、耳を傾けた。

「うん、佐藤くんは一人暮らししてて、アパートに住んでたみたいだよ。ほら……受付近くに立ってた化粧厚いおばさんいたじゃん。あの人と仲悪かったみたいでさー」

振り向いて声の発信源を見ると、女子生徒二人が堂々と内緒話をしているのが目に入った。

もう少しボリューム下げろよ。

そうは思いながらも、その話題への興味が尽きなかった星弥は、目をつむり、一息ついて、意識を切り替えて二人に近づいた。

学校にいる時のように、話しかける。

「あの、ちよつといいかな」

高等部一年の証である赤いリボンを確認してから、星弥はフランクに声をかける。

二人は一瞬ぎょつとしたような反応しめしたが、片方が星弥の顔をまじまじと見て、別の形で驚いた。

「あ、え、日月先輩ですか……！？」

「？ あれ、どっかで会ったっけ？」

全く記憶にない。ないが、星弥は佐藤の事もあったので少し逡巡する。

「あ、いえ、初対面です！ でもあの、せーと会とかの活動でよく目にしていたので……」

「……ああ、なるほど」

手をふりながら顔を赤らめてそう言う女子生徒の言葉に納得する。
……ということは、往々にして中等部からのエスカレーター組か。
まあ名前が知られているなら話が早い。

「さっきの話なんだけどさ、佐藤とこの家のおばさんが仲悪いって話……まじ？」

未だに状況が掴めていないもう一人の少女も込みで、やや身を寄せ合った形で話す事になった。

彼女たちは佐藤のクラスメイトだった。

何でも、佐藤が此咲市に引っ越してきてからの監督役がこの家に住む叔母なのだが、最後まで反りが合わなかったと漏らしていたとか。

……女子生徒たちは知らなかったようだが、監督役とは名ばかりで、実際に援助をしてくれていたのは佐藤の言う叔父という存在のはずだ。

星弥の中で色々と想像が進む中、星弥を知っていた女子生徒は更に饒舌になる。

「ああ、でも見張り役ってだけで身元ほしー人とかじゃなかったみたいです。おばさんとそういう関係なのは妹さんみたいでー」

「……？ 佐藤、妹いるの？」

「はい、いるみたいですよ。いつも一日置きにびょーいん行っちゃったから。私も帰りのバス、そっち方面なんで！ 此咲中央病院なんですけど、何かすごく悪いらしくて、手術もアメリカかなんかじゃないとできないみたいで」

——オレには叶えたい夢があります。

「かわいそーですよ。両親も死んじゃったのに、お兄ちゃんも死んじゃって……今日も佐藤君の顔見れないんですよ？ 死体がひどいみたいで」

——百億。前回の優勝者が獲得した金額です。

「妹さん、名前由美ちゃんだったでしょ？ なんかそれわたしも聞いた事ある！ 本人じゃなくて、男子の誰かだったと思うけど……」

結構噂になってたよね、絵に書いたような悲劇の主人公みたいで」

——人としての夢を叶える……それ相応の金額だと思いませんか？
いけない。

その想像は、いけない。

それ以上踏み込むと、溺れてしまう。

——二十年かけても、五十年かけても、かなわないかもしれない
夢が——

「……そっか、なんかいきなりごめんな、突然話しかけちゃって。
ありがとな」

「あれ、先輩は通夜最後までいないんですか？」

「ちよつと用事があったな。それじゃあ……」

思考の海から逃れるように、急ぎ早にその場を後にする。

勢いのままに、式場を離れ、ただ黙々と歩いた。

歩き続けた。

足を止めることはなかった。

どこをどう歩いているか、どうして歩いているのか、そういう考
えが星弥には浮かんてこない。

ただただ、ただただ……歩き続ける。

忘れようとして、その思いを運動量で消化する。

足りない。

まだ、足りない。

……その内、星弥は抑えきれずに駆け出した。走る。

夜も深まってきた住宅街は閑静で、ただ革靴がコンクリートを踏
みつける音と、荒い息だけが世界を包む。

すぐに限界がきた。運動不足がたたる。体が酸素を求めて、足は
もつれ、動かなくなつた。

「はぁ、はぁ……」

呼吸を整える。酸素を吸収して、全身に行き渡らせる。

これ以上、踏み込むな。

心のどこかで、そんな声が聞こえる。

お前は正義のヒーローじゃない。

そんな自己犠牲の精神は、お前には備わっていない。

生き延びろ。ただそれだけを考えろ。

死にたくない。死にたくないだろう？

もうこんなのは嫌だ。嫌だろう？

でも……。やめろ、もう考えるな。

馬鹿だ。

お前が今考えている事は、馬鹿が考える事だ。

愚か者と言ってもいい。愚者だ。全てを捨てて……命を捨ててゼロになる勇氣など、お前には存在しない。

……そうだ、俺にはそんな勇氣はない。そうだ、そんな勇氣はない。

でも……もう少しだけ、佐藤一という人間に関わりたいう、そういう思いがある。

それは正義でも、怒りでも、復讐でもない。

単なる好奇心だ。

「——そうだ。そもそも、このゲームに参加したのだって」

好奇心は身を滅ぼす。そう言ったのは誰だったか。

君子危うきに近寄らず、虎穴に入らずんば虎児を得ず、ミイラ取

りがミイラになる……。

しっくりくる言葉が、今はない。

だが、今自分が考えている事は、とても愚かな事だ。

「……佐藤の妹に、会ってみよう」

そう決心して、自宅に戻った星弥は、静かに日付変更線を迎えた。
二日目が、終わる。

『二日目が終了しました。経過報告を開始します。▽』

きた。経過報告だ。星弥は読み進める。

『今日の一言…三はとてもいい数字ですね。ゲームを本格的に始めるのにも丁度いいでしょう。』

引きこもり気味の皆さんは、ホルダーサーチで自宅がバレてしまう危険性、考えていますか？▽』

余計なお世話だ……とは言いきれない。

そうして意識してみると、自宅だけでなく、普段利用するような施設に長時間滞在するのはあまりよくない。

ましてや自宅が見つかれば、それこそ今後居住区にいる事ができなくなる。

……そういう意味で、この今日の一言というのは強烈なメッセージだ。

ここまで静観を決め込んでいたホルダーも、これで何人か動き出すかもしれない。

次に、現在のプレイヤー人数が表示される。

『二目を迎えたプレイヤーは十三人。二目のリタイアは七名と

なりました。▽

「……！」

七人もリタイアしたのか。

なにが嵐の前だ。二日目からやる気のあるやつばかりじゃないか。

▽ 『リタイアされた方のお名前、リタイア原因は以下のとおりです。』

▽ 『【うえのまさと　さま】

ホルダーと遭遇し、為す術もなくカードを破壊されました。

完全に力負けです。残念、アンラッキー。相手が悪かったですね。

▽

……力負けか。俺がホルダーに見つかって瞬殺されたら、こんな風に表示されるのだろうか。

▽ 『【おおのひろこ　さま】

ホルダーと遭遇し、為す術もなくカードを破壊されました。

完全に力負けです。残念、アンラッキー。相手が悪かったですね。

▽

……？

▽ 『【おおつかとしゆき　さま】

ホルダーと遭遇し、為す術もなくカードを破壊されました。

完全に力負けです。残念、アンラッキー。相手が悪かったですね。

▽

……おいおい。

星弥はメッセージを送る。

完全に力負けです。

完全に力負けです。

完全に力負けです。

『【おおひらゆうじ　さま】

ホルダーと遭遇し、為す術もなくカードを破壊されました。

完全に力負けです。残念、アンラッキー。相手が悪かったですね。

▽』

「なんだこれ。全部力負けじゃないか」

……未知の敵に、星弥は背筋が寒くなるのを感じていた。

もしかして、この七人は全て……同じホルダーに倒されたのか？
いやむしろ、まるで敵わないような強力なクラフトを持つホルダーが複数人いるという可能性も……。

「……くそ」

気持ちが悪らつく自分自身に、小さく毒を吐く。

正直に言えば、何の決意もできていないし、一つの覚悟もしていない。

だが、それでも……まだ出せない答えを出すために、星弥は明日に備えて寝る事にした。

『それでは、ゲームは三日目へと突入します。

残りの参加者の皆様に、ナイアールラトテップの微笑みがありますように▽』

『ナイアーラトテップの微笑み』

ゲーム続行 三日目

＊

朝早く起床して朝食をとり、制服に身を包んでから星弥は此咲中央病院へと足を運んだ。

実際に会えるかはわからなかったし、夏休みに入ったのに制服で動きまわるのはあまり避けたい。

だが、佐藤の妹に会ってからの事を考えると制服が一番都合が良かった。

その制服姿のまま、人通りが集中する大通りを選びながらも、バスなどの緊急時に動き回れないようなものを避けて昼前には病院にやってくる。

「……あしいてー」

昨日の佐藤宅への徒歩といい、今日の此咲中央までの徒歩といい、全くもって良い運動だ。

筋肉痛になったらどうするかなどと悩んだが、病院の前で筋肉痛の心配をしているのも馬鹿らしくなったのでさっさと病院に入る事にする。

此咲中央病院は、此咲中央区の施設レベルの高さに漏れず、救命救急センターや救命ヘリ用のヘリポートまで備えた大きな病院だ。

ただ、大きな病院というのが今回の場合はネックでもあった。

この手の大病院で、受付で病室を聞けるかどうか、というのが不安だったのである。

「佐藤由美さんね……あなた此高の生徒でしょ？ 病室は322よ」

……だが、ダメ元で聞いてみたところあっさりと教えてもらえて、星弥は拍子抜けをした。

「ホントはいけないんだけど、今回は特別だからね」

「あ、はい。ありがとうございます」

小声でそういう看護師の女性に対して、星弥はお礼を告げた。

制服姿だったのがよかったのだろうか？ 女性はくすくすと笑っていたが、星弥は特に気にせずその病室へと足を向ける。

……見舞いの品をもって来なかったな、と一瞬考えがよぎるが、初対面の相手に何を持ってくればいいかわからないので諦めた。病棟の三階にある一番端の個室が、佐藤一の妹……佐藤由美の病室だった。

目的の部屋のすぐ脇にある階段から上ってきた看護師がすぎるのを待ってから、星弥はドアへと近づく。

コンコン、とノックをすると、数秒遅れて控えめな声が聞こえてきた。

「――はい」

星弥はスライド式のドアを開けながら、小さく息を吐いて、意識を切り替える。

「失礼します」

「……？」

入った先で、ベッドから起き上がっていたパジャマの少女と目が

合った。

第一印象は、日本人形のような少女だった。外見からして年齢は中学生ぐらいだろうか。

黒いショートカットの髪に、小さな作りのパーツ。それに色白い肌。

顔立ちのそれに佐藤一に似たものを感じて、それが太めの眉に由来するものと気付き星弥は妙な親近感を抱いた。

……佐藤とも、別に長い付き合いじゃないくせに。

「……あの」

ドアの前で突っ立ったままの星弥に不信感を抱いたらしく、眉をひそめて少女……由美が声をかけてくる。

ハッとして、慌てて星弥は声を出しながらベッドの手前まで移動した。

「……！ ああ、いや、すみません。佐藤によく似ているなと思って……ってそうじゃないな、あの、俺は」

「あ、えと……お兄ちゃんの、友達ですか？」

お兄ちゃん、という言葉にすれていない印象を抱きつつ、星弥は頷く。

「あの、俺、日月星弥って言います。佐藤の一年上で、昔ちよっと生徒会で付き合いがあった」

「――日月先輩？ 生徒会の？」

生徒会の。昨日に続いてまたその単語が出てきた。

「……あの、それはもしかして、佐藤から？」

「あはは、そうです。お兄ちゃんがちよっと前に話してくれた事があって、それで」

「ああ、そうなんだ……」

佐藤……久しぶりに再会した時にも俺の事を覚えていたし、忘れていたのは俺だけだったのか。

なんだかバツが悪くなって、星弥は後頭部を掻く。

「それで、えっと……日月さん？ 日月さんは、今日何か？ お

兄ちゃんならまだ来ないと思いますけど」

「……？ 来ない？」

何を言っているんだ？

「はい。えっと……いつもは大体お昼過ぎに来ますね。午後一時くらいでしょうか。まだ午前中ですから、どこかでお食事をとってもらえれば丁度いい感じになると思いますけど」

「……………」

星弥は病室の中を見渡す。

テレビはない。この部屋には置いていないのだろう。

ベッドの脇の棚には本が置いてあるだけで、新聞の類もない。この年頃の少女なら読むものではないのだろうか。

他にあるのは、よくわからない医療機械らしきもので、白い管が伸びて由美のベッドの中へと消えている。

……………知らない、のか？

星弥の動悸が早まる。肉親が死んだというのに、その知らせを伝えないものなのだろうか？

ましてや、佐藤の死体は病院に搬送されたはずだ。看護師たちが耳に入れて、連絡してもいいはず。

それとも、耳に入るとまずい事なのだろうか。

昨晚の女子生徒たちが話していた、アメリカの手術云々という言葉で、様々に憶測を立てる。

……病は気からとも言うし、あえて伝えていないのかもしれない。星弥は意を決する。

「——ああ、そうなんですか。まあ佐藤に会えるかな、とも思っただけですけど、それとなく妹さんの事も耳にしたので、お見舞いに行こうかなと」

「そうだったんですか。わざわざすみません」

そう言って、ゆっくりと由美は頭を下げる。

「いやいや。気にしないでください。見舞いの品も持って来てない思いつきのものですし」

そもそも、本当のことを伝えていない自分に、頭を下げる必要もない。

「……………」

「……………」

一瞬、会話が止まる。

星弥は踏み込む。

「あの、病気っていうのは聞いていたんですけど……。失礼ですけど、入院して長いんですか？」

「……ああ、はい。そうですね、もう二年くらいでしょうか」

「二年、ですか」

「はい。昔から体は弱かったんですけど、こんなに長く入院するのは初めてで」

困ったように笑顔を浮かべる由美に、星弥は人柄の良さを感じた。可愛らしい女の子だ。

「佐藤のやつ、一言もこんな可愛い妹がいるなんて言ってなかったんですけどね」

思わず星弥も笑みがこぼれて、冗談交じりにそんな事を言ってしまう。

色白い顔を真っ赤にしてうつむき黙る由美をみて、星弥は軽口を叩いたのを後悔した。

ごまかす。

「まあ、もしかしたら妹が入院しているっていうの、俺に教えたくなかっただけなのかもしれないけど」

「あ、あはは……そ、そうですね。そうかもしれません。日月さん、かっこいいですし」

苦笑して言い放った由美の言動に、今度は星弥の思考がフリーズした。

それに気付いてか、由美が言葉を続ける。

「！ あ、あの、お兄ちゃんがよくイケメンイケメンって言ったので、本当にそうだったのに驚いたっていうか」

「ああ、いや……俺が悪かったんで、もう勘弁してください」

顔が熱くなるのを感じて、星弥は左手で顔を押さえながら言う。

「ええ、いや、そうじゃなくて、かっこいいと思ったのは本当です……」

由美という単語についた、手という文字が二つ、空中で左右に揺れる。

……左手を離して顛帯観測を解除すると、困ったような顔をして由美が弁解していた。

どうやら星弥が「カッコイイってそれ皮肉か」といった趣旨の捻くれた発言をしたと勘違いしたらしく、由美は的はずれな弁解を続ける。

「日月星弥ってアイドルみたいな名前で、見た目もすごくさわやかって聞いてたので！ 名前も個性的で覚えやすかったので、言われてすぐ見てわかったっていうか」

「いや、いや！ もう！ もうわかったから！ わかったんで、その話はもうなしで！」

「あ、あの、ごめんなさい！」

「いや、こちらこそ……！」

結局、落ち着くのに数分の時間を要した。

日月は大きく息をついて調子を整えたが、初対面の相手になれていないらしく、由美は少しあたふたとしたままだである。

まあ、最初の頃の他人行儀な反応よりは少しは砕けた方が年下らしい、と星弥は思った。

——それでも、まだ星弥は踏み込む。

「……えーと、実は今日は、佐藤に会いに来たわけじゃないんだ」「え？」

不意に切り出した言葉に、由美は顔を上げる。

「実はちよっと、由美さんに聞きたい事があって」

「はあ……なんでしょう？」

「あいつ……って佐藤、君のお兄さんなんだけどさ。あいつ、金を貯めてどうしても叶えたい夢がある、って言ってたんだよね」

「……………」

「どうしてもそれが何か教えてくれなくてさ。それで、ちょっと意地が悪いかなとは思ったんだけど、妹さんが入院してるっていうから、もしかしてって思ってた……」

「……………」そう、ですね。多分、日月さんの想像通りだと、思います」

由美の表情が暗くなり、そうして彼女は肯定の意を述べた。

想像通り。その言葉に対して、それ以上追求する気持ちが消えていく。

……正直いって、嘘についてここまで言っただけでも我ながらに星弥は罪悪感がある。

なので、次にどう言葉を付け加えるかと言いつつを考えている内に、由美に先んじて口を開かれてしまった。

「私、実は心臓の方を患ってしまった。……今、機械でそれを補ってるんです」

そういつて目配せをしたのは、先程星弥が目につけた四角形の機械だった。

その機械のチューブはベッドの中へと消えており、それはおそらく由美と繋がっているのだろう。

……人工心臓、というやつだろうか。星弥は詳しくもない知識を頭の中から引き出す。

「あ、でも、最初の頃は動けなかったんですけれど、リハビリをして食事をして、今は結構元気になったんです！」

星弥が無言だったのを察してか、少し明るい調子で由美はそう言う。

「……でも、やっぱり手術とかが必要なんですよね？」

星弥の率直な返しに、由美は一瞬言葉を失うが、すぐにこくりと頷く。

「そうですね、お医者さんにも、出来れば心臓の移植手術が望ましいと説明されました。でも……」

……金、か。

星弥は佐藤が語った言葉と、由美の語る移植手術とをつなぎあわせていた。

実際の心臓移植がどのような代物なのかは詳しくないが、よく手術費を集める為の募金活動などを耳にする。

その手術費は、到底普通の家庭では支払えない額だというのはわかった。

なら、佐藤の叔父に資金を出してもらえばいいんじゃないか？

そうも思ったが、叔父の会社が倒産していたのを思い出す。

……それに、今の今まで手術できなかったのは金のせいだけとも限らない。確か心臓移植には、ドナー登録者の存在や、他にも色々面倒な手続きや法律があったはずだ。

——だから、お前はゲームへの参加を望んだのか？

今はいない佐藤に内心でそう問い、星弥はいたたまれなくなった。会話を打ち切るべく、星弥は切りだす。

「……すみません。押しかけてきていきなりこんな事を聞いて」

「あ、いえ。それはいいんです。それに、わざわざこんな所まで来てお兄ちゃんの事聞こうとしてくれる人がいるのも、結構うれしいので」

「……………。それじゃあ俺、そろそろ行きますね」

「もう大丈夫なんですか？」

「はい。……すみません、最初、佐藤に会いに来たとか嘘について」
佐藤がどうなっているかを、黙っていて。

「いえ、そんな。……そんなに畏まらないで下さい。よろしければまた……っていうのはあれですけど、お兄ちゃんの事でまた何かあったら、お気軽にどうぞ」

「ええ、そうします」

「ああ、でも」

「はい？」

「出来れば次来る時は、敬語はもう少し控えて下さい。年上の人にあんまり敬語使われるの、居心地悪いので」

何度目だろうか。彼女はそうして困ったように笑い、星弥に会釈のようなお辞儀をした。

……病室を後にする。

ドアを閉めて、窓際まで足を運んで、星弥は改めて動悸を落ち着けるのに時間をかけた。

あそこまで話し込んでおいてなんだが、星弥は女子の相手が得意ではない。

昨日の通夜の時もそうだったが、少し気合を入れておかないと話疲れる、というのが星弥の言である。

まさか、二日つづけて見知らぬ女子に話しかける事になろうとは。その精神的な疲労を打ち消そうと窓からの景色を眺めていると、パタパタと星弥に駆け寄ってくる足音がした。

「ねえねえ、ちょっと」

反応して視線を向けると、近づいてきたのはナース服の女性だった。

一瞬疑問に思うが、すぐに星弥は答えに行き着く。確か受付で病室を教えてくれた人だ。

「はい、どうかしましたか？」

「あ、ごめん、病室の前だからもう少し静かに……あのね、もう由美ちゃんと会った？」

「？ はい、会いましたけど」

「……由美ちゃんのお兄さんの事、知ってる？」

「——はい、知ってます。でも、言ってませんよ」
なんだ、その事か。

星弥は内心でため息をついた。やはりまだ彼女には伝えたくないようだ。

病室を教えてくれたのは感謝したいが、今頃になって慌てて追いかけてくるあたり、少し間の抜けた感じを思わせる女性である。

「佐藤の事は残念でしたけど、ちょっと話をふって知らない感じだったんで、その事については触れてません」

「そっかーよかったー。言っちゃってたらどうしようかと 警報が鳴る。」

制服のポケットから強烈な電子音が放たれていた。

一瞬、星弥は思考が停止し、体が固まる。

「警報警報だったからさ、警報警報警報警報をまだ由美ちゃ警報警報警報警報で警報警報……? どうか警報警報? ねえ、大丈夫?」

……警報が収まった。

目の前の彼女を真っ先に疑う。違う、それならもっと前にエンカウントが反応するはずだ。

気遣ってくる看護師の女性を無視して、星弥はポケットからクラフトカードを取り出した。

『ホルダーとエンカウントしました。』

間違いない。三十メートル以内にホルダーがいる……!

「ねえ、どうしたの? 気分が悪いの?」

肩に手をおかれて、星弥は心臓がはねた。勢いで顔をあげると、看護師の女性が驚いたように目を見開く。

「ど、どうしたの……? ホントに大丈夫? どこか痛い?」

「いえ、大丈夫なんで! あの、ちょっと急ぎの用事が出来たのでこれで!」

そう言って肩に置かれた手を振りほどき、星弥は階段まで駆け寄る。

「あ、ねえ、ちょっキョッ——」

壁際に張り付く。ここが病棟の端だったのが幸いだ。あとは振り向いて、ホルダーサーチをかけて相手の場所を突き止める！

星弥は振り返った。

看護師の女性が、鋭利なトゲのようなもので串刺しになっていた。あまりにも唐突な出来事に、反応が遅れるが、目ではそれを冷静に観察する。

彼女は、足元から伸びた長いトゲで膝から首元にかけてを貫かれていた。……あまりにも長く大きく、トゲというよりはもはや槍に近い大きさだ。

槍は床から直に伸びていて、まるで床が変形してその形をなしたかのように感じられる。

血がびちゃびちゃと床に広がっていく。看護師の女性の反応はない。死んでいるのかもしれない。

星弥は腰が抜けそうになった。

それをこらえるために足元をみて、足元の床がぐにやりと歪んでいるような違和感を抱いた瞬間に、咄嗟に階段の方へ転がる。

それこそ転がり落ちるような勢いで倒れこんで振り返ると、先程まで立っていた場所に音もなく槍が突き出ていた。

あそこにいたら俺はどうなっていた。

いや待てそんな事を考えている暇はない。

まず動け。

足元から槍がくる。

出てきたら終わりだ。

瞬時に貫かれる。

足元を見ろ。

逃げろ。

逃げろ逃げろ。

死にたくない。

死にたくない……！！！！

やめておけばよかったんだ、こんな最悪のタイミングで、敵に出

会うなんて。

そうだ。リタイアすればよかったんだ。

あいつが言っていたように、諦めればよかった。

そうだ、それが一番、利口な……。

——先輩なら、”あたまがいー”から、わかるはずです。

どこかで誰かが言った、人を小馬鹿にしたような言葉が脳裏をよぎった。

なぜか、腹立たしさと共に星弥は落ち着きを取り戻す。

いや、落ち着いたが、落ち着いてはいられない。

飛び引くように階段を駆け下りる。先ほどまでいた階段のところに槍が出た。

間違いない。原理はよくわからないが、エンカウント警報が出た後にこのよくわからない現象がある以上、これはクラフトによるもので、相手はホルダーだ。

つまりホルダーは敵であり、俺を殺しに来ている！

足元をみて、床がぐにゃりと動く様をみてからそこから動いた。

床から長い槍が出てくる。

なぜもつと早く槍を出さない？ 素早く出せないのかもしれない。

もつと素早く槍が出れば俺はどうに死んでいるぞ？ 発動までに

タイムラグがあるのかもしれない。

なぜ床から槍が出てくるんだ？ 床の材質はコンクリートのはずだ。それを変形させているのだろうか。

なぜ俺の位置がわかる？ ホルダーサーチ……ではない。ホルダーサーチは連続使用できない。つまり相手はこちらの位置を把握する力を持っている。

どうやって位置を把握している？ わからない。だがクラフトの

能力である可能性は大だ。

床が歪んだのに反応して、星弥はまた移動する。

そのまま階段を駆け降りて、二階のフロアに出た。病室がずらつと並ぶ廊下は、向こうの方まで誰もいない。

壁際によって、星弥はクラフトカードを前方に向けてサーチを使つた。

急げ、急げ。早る気持ちを抑えきれず、結果が出る前に動く。槍が飛び出してくる。

クラフトカードがピロリロリン、という間の抜けた電子音を鳴らした。

『ホルダーを発見しました。』

前方約十メートル。高低差、約プラス二十メートルの位置『プラス二十メートル……斜め上……上の階にいるのか!？』

星弥は場所を移しながら、階段でフロアの数を確認した。

この病棟は七階建てだ。ここは二階。二十メートル上って事は……。

「六階か七階か、それか屋上だろ……!」

星弥は階段を駆け上がりはじめた。

槍の後は既に階段からは消えている。三階の踊り場に出た時、血まみれで崩れ落ちている看護師を見た。

更に階段を駆け上がる。槍が目の前に伸びてくる事はない。ふと後ろを振り返ると、すぐ眼の前で槍が飛び出していた。

息が切れそうになる。それでも階段を駆け上がる。

五階へ来た。あと一階、二階……!

……星弥は、自分が重大な事を失念しているのに気づかない。

星弥の顛帯観測は、自分で立てた結論では、戦闘能力がないという事。

それを踏まえた上で、まずは階段を登るのではなく、降りる事で建物から一刻も早く離れるべきだった事。

そして、何よりも、生き延びたい、逃げたいという思いで自分はいっぱいだったという事。

それでも、星弥は階段を駆け上がる。

がむしゃらに、駆け上がる。

あまりに急な出来事に対応できず、正常な判断ができていないのか。

逆上して、周りが見えなくなっているのか。

それとも……誰かの言葉を思い出し、内面に僅かに変化があったからなのか。

明確な理由は、星弥の中にすら存在しなかった。

だが、今まさにこの時から、星弥の長い長い戦いが、始まった。

05／変化

階段を駆け上がった星弥は、六階の廊下に飛び出した。

視界に人影が映る。

白衣に身を包んだ医者 of 男と看護師の女、それに少し離れたところに窓の外を眺めるパジャマ姿の老夫が一人。

……考えろ。ここに敵はいるか？

医者と看護師は星弥とは反対方向へと歩いて行く。その仕草からして、こちらにも気づいていない。無害の可能性が高い。

ではあそこに立っている老人は？ 窓の外へと意識が向いている。もしも何らかの形でこちらの場所がわかっているなら……。

星弥は慌てて動く。先ほどまで立っていた場所に音もなく槍が突き出た。

……場所がわかっているなら、俺がここにいる時点で何らかの反応を示すはずだ。

なら、彼もホルダーではない可能性が高い。来ているのを理解した上で無反応を貫いている可能性はあるが、いや……そうじゃない。

——またやっている。焦るな！ 思考が空回りしてるのを自覚しろ！

星弥は自分の頭を小突く。冷静になったフリをしても、思考が正常ではないのは明らかだ。

星弥はまた動く。最小限に、早足で動いて、槍が突き出るのを確認する。

左手を顔に添えた。そう、星弥には顛^{これ}帯観測がある。悩む必要はない。見たままを判断し、視界内にホルダーがいるかを知ればいい。そうして再度、廊下を確認する。医者と看護師は既に姿が見えなくなっており、老人はまだ窓の外を眺めていた。

左目で見える。

患者の二文字……ホルダーではない。

六階の廊下にホルダーはいない。そう確認して、また少しだけ動いて槍を避ける。

槍。一文字で書かれたそれは、槍の形状までは示さない。星弥は顛帯観測を解除して、通常の視界に戻した。

——この何らかの攻撃は殺傷力があるのかもしれないが、即応性にはかなり難があるのを星弥は把握し始めていた。

遭遇時にはとにかく逃げまわってしまったが、落ち着いてみると早足程度の動きにこの槍の発生は追いつけていない。回避する。

数は必ず一つだが途絶えず出続け、地面から槍が伸び、貫いてくる。

……だが、それだけだ。

地面が歪む瞬間を確認してからでも、急いで動けば回避できる。

槍は必ず真上へと伸びる。

床が歪んでから槍が伸び始めるまでにだいたい二秒。

槍が伸び始めたら、完全に伸びきるまではほぼ一瞬といったところか。

油断しては危険だが、常に足元を確認していれば回避できる。星弥は何度目かの槍を回避する。

……この槍の発生に音がないのが救いか。もっともらしい轟音などを立てようものなら、すぐに近くの病室の患者たちが気づくだろう。槍を避ける。

まずは呼吸を整えて、体力を回復しないといけない。こんな時に、日頃の運動不足と、久しぶりの運動で筋肉痛になっている足が仇になった。避ける。

こうして見ると、この槍にはもはや脅威は感じられない。避ける。精神的にはプレッシャーになるものの、少なくとも廊下を早歩きする程度に移動していればまず当たらない攻撃だ。避ける。

遠目から車がやってくるのがわかっていながら、急ぎ足で道路を横断してしまう。その程度の危険である。避ける。

だが、いつまでも避け続けているわけにもいかない。どこかで集中力はきれるだろうし、このままというわけにも……避ける。

——そもそも、この槍はどうやって俺を探しているんだ？

星弥は疑問を浮かべる。

その疑問を推理するには、槍の発動間隔は思考を中断させる程度には頻繁であり、もどかしい。

槍を避けながらも、老人が病室に戻ったのを確認して反対側の階段へと移動した。

槍はやはり、数歩遅れて追いかけてくる。早歩きを続ける限りはまず捕まる事はない。

このままの速度を維持して、残りの階も搜索すれば……。

星弥は足早に階段踊り場へと歩み寄った。

「おっと！」

「うわっと！」

歩み寄ったところで、階段を上がってきた男性とぶつかりそうになる。

「す、すみま、せ……！」

咄嗟に立ち止まり、目と鼻の先まで近づいた男を見上げて、そう声だけを出す。

思考が停止した。どうする。巻き込んでしまう。何か、何とかして伝えないと……！

「あ、え、と」

伝えたい危険が言葉にならない。

「いや、こっちこそごめんね。急いでだから」

そういつて男……服装からして医者の方は、ゆったりと踵を返し

た。

そのまま背を向けて、遠くへ離れてくれれば……！
足元を見る。まだ歪んでいない。

顔を上げて、男をみる。

男は、”無音で現れた槍に貫かれていた”。

「……！！」

星弥は息を飲む。いや、単純にその殺傷力に恐怖して、声が出なかっただけだ。

先ほどの看護師の女性同様、槍に貫かれ空中に浮き上がった男は、声にならないかすれた音を出して、すぐに動かなくなった。

「先生、ちょっといいですか！ 下の階で塚原さんが血まみれで倒れてて……っ！」

数秒遅れて、今度は階段を駆け上がってきた看護師の男と鉢合わせした。

看護師の男は不気味に突き立った槍に貫かれた男性医師を見て目を見開き、続いて同じく硬直して動けなかった星弥と目が合う。

先に思考を取り戻したのは星弥だった。

まずい、早くこの場から離れなければ。

そう考えながら、足元を確認して足を動かそうとする。

——床が歪んでいない。

一瞬、動き出そうとした足に、脳の全ての電気信号を使って、静止を呼びかけた。

動くな……！ 待て！

「——う、うわああああああ……！！！！！！」

直後、看護師の男が叫んだ。

反射的に動きたくなる自分を、星弥は必死に止める。

待て、まだ動くな。

”まだ、足元の床は歪んでいない”。

……槍が消失し、男性医師の体が床に落ちる。

べちゃ、と血の池に落ちた音がして、口元を押さえて震えていた男が今度こそ階段を上がりきって医師に駆け寄る。

看護師の男が通り過ぎた後に、無音の槍が突き立った。

「……！ あなた！ その場を離れて、早く！」

「……！？ え、でも、相模先生が……！ 君、ここで何があった——」

倒れて動かない男性医師に駆け寄った看護師は、しゃがんでいる状態から槍の餌食になった。

「あ、が……」

苦悶の声が聞こえる。星弥は震えを抑えるべく、下を向いて、拳を握った。

……まだ、足元の床は、歪んでいない……。

——星弥は数えた。槍が出てから、それが消えて、看護師の男が床に落ちるまでを数えた。

八秒。べちゃ、という嫌な音が聞こえ、血が足元まで飛んで来る。

床が歪んで起動までに二秒。

槍が発生しその形状になるまではコンマ五秒。

槍の形状を保ってられるのは、八秒。

そして、星弥の足元の床は、まだ歪まない。

星弥の中に、一つの解答が生まれた。

……震える手で、懷を探る。時間がない。悲鳴が上がってから一分。もういつ、背後の病室から患者が出てくるかもわからない。

探す。探す。探す。

……内ポケットで、クシャリ、というビニールの音を耳にした。取り出す。ママの味と書かれた、ミルクキャンディが三つ。

包装を取り外し、目の前の床に、手首のスナップを効かせて一つ投げつけた。

カチン、というかわいた音が床に響く。

床が、歪む。

槍が出る。

眼の前に発生した槍を確認して、星弥は核心に至った。

十――――幕間

『ナイアーラトテップにはほえまれたあなたへ！』

……桂貞義は、かつら・さだよし”力”を手に入れた。

今から三日前。窓際に置かれていた不審な封筒の中に入っていた、手紙と飴。

最初は嘘くさいと思っていた貞義だったが、好奇心に負けて飴を舐め、彼の世界は一変することになった。

長らく病院で暇を持て余していた彼にとっての、最高の”おもちゃ”がやってきたのである。

ゲーム機じみたインターフェイス、自分の能力値を示すステータス、クラフトという異質な能力。

何もかもが新鮮で、何もかもが斬新だった。

そして同時に、血沸き肉踊る感覚を、貞義は抑えきれなかった。

――超能力者同士による壮絶な戦い。しかも、優勝者は願いを何でも一つ叶えられるというじゃないか。

本当にあった、漫画やアニメの中のような世界。

そして、本当だとしたらこれほどの幸福はないほどの、優勝者への賞品。

ナイアーラトテップに微笑まれた彼は、ゲームに関わるもの、それに関する事、その全てに魅了されてしまっていた。

……貞義にも夢がある。

小さくも、人として有り触れていて、誰もがもっているはずの、どこにでもある夢だ。

だが、それを叶えるための障害は、あまりにも多かった。だから、このゲームが目の前に現れた時に、彼は歓喜したのである。

そして、待ちに待った。待ち続けた。

一日の時間が一ヶ月のように感じられるほど、長く、長く待っていた。

……彼は病院から出ることはできない。というより、出る事はできないが出ようとは思わない。

様々な都合はあれど、彼は彼なりに考えた結果、彼にとっての陣地はあくまでこの”病棟”だと定めたのである。

この建物を城として捉え、入り込んできた対戦相手で”経験値”を上げる。

そんなイメージをして過ごし続けた貞義は、ついに待ち望んだその日を迎えた。

日課を終えて病室へ帰る途中、耳をつんざくような警報が鳴り響いたのである。

貞義はクラフトを起動した。同時にホルダーサーチを行う。

何度も何度も、この数日の間にイメージトレーニングをこなしてきた。

まずはサーチで敵の場所を把握する。

そして、空中に現れたディスプレイで、改めて敵ホルダーの捕捉を始めた。

——針の夢城。ニードリームキャッスル

それが貞義のクラフトである。

SF映画に出てくるような光学ディスプレイが宙に出現し、様々なコマンドメニューをタッチして操作するクラフトだ。

ぶどう味のラヴクラフトから生み出されたこの針の夢城は、陣地と決めた場所をホルダーのテリトリーにし、内部で様々な力を発現させる能力がある。

弱点もいくつかあるが、敵への牽制から戦略的な陣地戦までを含めて、大局的な使用が可能なクラフトだ。

貞義はホルダーの位置を下の階だと特定するなり、とにかく距離を取ろうと上の階を目指した。

針の夢城には大まかに『召喚』『索敵』『建築』という三つのコマンドがある。

索敵のコマンドを押して敵の位置を把握した貞義は、ディスプレイ……リーダーとして表示された病棟のマップにつく足あとのマークを見て、『召喚』を使用する。

召喚するのは、『ニードル』。ニードルのアイコンがディスプレイでタッチした指先に出現し、そのアイコンを足あとがついている場所へと指で運ぶ。

離すと、ニードルが”発動”する。

それをこの距離で実際に見る事はできないが、一度試しに使ってみた際には、かなり大きな針が床から飛び出すのを確認できた。

ニードルが発動すると、そのアイコンの所でニードルの発動を知らせる波紋のようなエフェクトが発生し、赤いバツ印が出る。

——赤いバツは命中の印、撃墜だ！

そう喜ぶ貞義だったが、すぐに赤いバツ印から動く足あとを確認した。

……当たったのに生きているのか？ 貞義は困惑する。

それが敵の能力なのか、それとも”クリティカル”には至らなかったのか。

……この時、赤いバツ印が出た所では看護師の女性にニードルが命中していたのだが、貞義はそれには気づかない。

そもそも、ニードルは誰に命中したのか、などという詳細な情報を出す機能が針の夢城には存在しなかった。

針の夢城のクラフトランクがC+（そこそこ！）というのもあるかもしれないが、どこか無機質で簡素なインターフェイスは、生の情報というものが伝わってこない。

だが、貞義はそれをものともしない。

今この場にあるゲーム盤を前にして、童心のままに、どこか楽しげにパネル操作を繰り返した。

『ニードル』、『ニードル』、『ニードル』！

七階に到着し、更に屋上を目指しながら、貞義はニードルを使い続ける。

召喚コマンドには有効射程があり、その射程以上の所にはコマンドを使用する事ができない。

現在敵と思われるホルダーを捕捉している位置に使えるのはニードルだけだったので、とにかく貞義はニードルを連発した。

同時にレーザーを確認し、敵ホルダーが徐々にこちらの階へ接近してくるのを確認して、『建設』コマンドを使う。

建設は発動までに時間がかかるが、それでもざっと数分で完成する代物である。

最終防衛の要としてうってつけだと判断して、貞義は笑みを浮かべて七階にそれを設置した。

数値が100%を目指して溜まっていくのを確認しながら、なおも貞義はニードルを使い続け……反対の六階踊り場で、敵が足を止めたのを確認する。

ニードルを撃ちこむ。

撃墜マークが出る。貞義は再び拳を強く握った。

足あとも出ない。当たったのか？

屋上のドアを開けながら、真昼の強い日差しを感じつつ、貞義は敵を仕留めたのかの判断に迷った。

……迷ったからこそ、階段から上がってきたその足あとに反応し

た。

反射的に、ニードルをドロップしてしまう。

「あっ」

思わず声が漏れる。赤いバツ印。

……やっちゃったか？

心臓がドクンとはねるのを貞義は感じたが、その赤いバツ印を避けるように動き出す足あとを確認して我に返る。

……なんだ？ まだ生きてるのか！？

一体どうなってるんだ。そう思いながらも、貞義はニードルで足あとを捕捉しつづけて……。

階段の中腹で足あとが出なくなり、『ニードル』も空振りに終わったところで、目を見開いた。

「……え？」

消えた。

間違いなく、反応が消えた。

どこだ？ どこへいった？

マップを上階……七階へと移す。先ほどまで反応があった六階の階段から上がってくる足あとは……ない。

五階へマップを戻す。足あとがいくつかある。

……こいつらか？ いや、違うかもしれない。というか、違うに決まってる。

完全に見逃した？ そもそも、どうやって消えた？

六階にはいない。七階にも来ていない。

まさかと思った五階にすらそれらしいものはなかった。

まさか、窓から外へ？

貞義は屋上の中央にあたるフェンス際へと移動し、腰を上げて外を見下ろす。

……見下ろしたところで、誰がホルダーなのかは貞義にわかるはずもなかった。

とにかく、事実として捕捉していたはずの敵がいなくなってしまう

った。

貞義はわけがわからぬまま、とにかくもう一度探そうとホルダーサーチのクールタイムを確認して、

ギイ、と屋上の扉が開く音を耳にした。

まずい、誰かがきた。慌てて針の夢城を解除する。手に持ったクラフトカードを両手で握りしめて、貞義は後ろへと体を向けた。

フェンスに移動したため、大分遠目になってしまったドアから、人が現れる。

——やってきたのは、制服に身を包んだ高校生だった。

頭でも痛いのか、左手で顔を押さええていて、ゆっくりと屋上に入ってくる。

貞義は、すぐその男の違和感に気づいた。

入ってくるなり貞義に向けられた強烈な視線。

おぼつかない歩調の不審な動き。

そして……靴やスリッパを履いていない、靴下の足。

それらをただ眺めているうちに、男が先に口を開いた。

「……お前が、ホルダーか！」

貞義は、背筋に悪寒が走るのを大きく感じ取っていた。

+

「……お前が、ホルダーか！」

言ってから星弥は後悔した。

見ればわかった。顛帯観測が発動している左目が、目の前の彼をホルダーと表示している。

「……………」

眼の前のホルダーの容姿に、少し戸惑ったのかもしれない。

——星弥の前に相對する、車椅子の十歳前後の少年。彼は星弥の言葉に押し黙り、ただこちらを見つめている。

その手の中にあるのは、間違いなくクラフトカードである。

なんでホルダーか確認したんだ。

どこまでバカなんだお前は。

星弥は内心で自分自身を罵る。階段からここまで槍に襲われずにこれたんだ、敵には”ここまで俺がきたのはバレていなかった”。

幸いにも相手は屋上の中央付近におり、距離もおそらく三十メートル離れているのだろう、エンカウントが発生しない。

なら、ホルダーを確認するのはいいとして、もっと普通を装い近づき、不意打ちを狙ってもよかった……。

……ましてや、相手があんな子供ともなれば、なおさら……。

「……だ、だったら、なんだよ！」

少年が、ようやくといった風に声を出す。

昼下がりの炎天下において、日差しを跳ね返すような白い肌と、少し癖のある黒い髪をもつ線の細い少年だった。

少年は車椅子に座っており、足が不自由なのがわかる。

——少年の願い——

余計な思考が混入する脳内を、かき混ぜてめちゃくちゃにして、星弥は思考を断ち切る。

「……クラフトカードを渡せ。おとなしく渡せば、痛い目を見ずに済むぞ」

我ながらあんまりなセリフだと星弥は思った。

だが同時に、子供相手ならば最も効果的であるとも考えた。

「俺はこの場から一撃でお前を”倒せる”。さあ、諦めてカードをこっちに投げろ！」

星弥は声を低く保ち、右手を少年に向けて差し出す。

「嫌だ！」

少年は焦燥しきっているようだったが、それでも従順ではなかつ

た。

ぎゅっとカードを握りしめ、強い意志をもって星弥を睨んでくる。怯みそうになったのは星弥だった。それでも何とかこらえて、言葉が続ける。

「……俺は本気だぞ。素直に従え」

言葉での説得は、通じないか。

実力行使をかねた威嚇でもしない限り、言うことを聞いてくれな
いかもしれない。

だが……星弥にはそもそも、威嚇する方法などなかった。

ここにきて初めて、星弥はなぜ敵目指してここまで走ってきたのかと自問する。

無我夢中だったから。

錯乱していたから。

気づいたら屋上にいただけだ。

言葉としてはいくつか思いつくものがあるが、おそらくそうではない。

そう、星弥は、ただ……。

「……お兄ちゃん、そんな事言って、クラフト、本当に使えるの？」
「!?」

不意に口を開いた少年の言葉の意図を汲み取れず、星弥は困惑する。

それはクラフトで攻撃できるのか、という意味か。

それとも、クラフトを本当に持っているのか、という意味か。

……正直いって、前者であってほしくはない。そこまで頭の回る子供など御免だ。

だから、星弥は後者だと判断して、少年へと歩み寄る。

それに反応して、少年は車椅子を動かすような仕草をした。

「待て。エンカウントを発動させるだけだ」

そう言っている内に、すぐに発動圏内に入ったのか、けたたましい音が鳴り響いた。

少年は思わず耳を塞ぐ。星弥も顔に当てたままの左手で、左耳だけを塞いだ。

音が止む。

「……エンカウントが作動した。これで俺がホルダーなのはわかっただろう」

「……っはははは！」

星弥の言葉を聞いてから、少年が笑い出したのをみて、星弥は不快感を抱いた。

なにがおかしいんだ？

「お兄ちゃん、バカでしょ？ お兄ちゃんがホルダーなんてのはすぐにわかるよ。そうじゃなくて、クラフトカードも持ってないのにどうやってクラフトを使うんだって話だよ！」

「……？」

何を言ってるんだ、こいつ？

クラフトカードを持っていないとクラフトが使えない？

身につけていないと使用できないという意味か？

いや、それならエンカウントが鳴った時点で俺がカードを持っているのはわかってるはずだ。

なら……どうということだ？

星弥が身動ぎしたのをみて、少年は更に声を上げる。

「ダメだよ！ 今からクラフトカードを取り出しても、おれは既に”クラフトカードを持ってる”んだ。おれの『ニードル』の方が早いよ！」

「なにを……」

動機が激しくなる。目の前の少年が語る未知の情報の真偽が掴めず、星弥は混乱した。

クラフトカードを持っている……そう言って少年は自信ありげにクラフトカードをちらつかせた。

瞬間、少年のクラフトカードが弾ける。

「!？」

クラフトカードが光の粒子になり、少年の目の前に広がって、SFじみたディスプレイのような姿に変化した。

なんだ、クラフトカードが変化した……?!

その一瞬の思考が、星弥の行動を秒単位で遅らせた。

少年はディスプレイのようなものをタッチして、何らかの操作を行う。

数秒して、それが何かはよくわからないが、”よくわからないという事は、あれはクラフトだ”と判断して、星弥は少年に駆け寄った。

「来ないでよ! 『ウォール』だ!」

強気な笑みを浮かべ、少年は英語で壁を意味する言葉を叫んだ。

次の瞬間、星弥は文字通りの壁に行く手を阻まれた。

顛倒観測が『壁』と視認したのは、淡く輝く、半透明の壁だ。駆け寄った勢いでそれに衝突した星弥は、分厚いガラスに体当たりしたかのような衝撃を受ける。

「くそ!」

「よし、来るぞ! 来い……来い!!」

少年は壁越しに目を輝かせ、星弥の方を見つめていた。

こんな壁、回り込めば……星弥はそう考え、同時に別の思考が生まれる。彼が見ているのは、本当に俺か？

その疑問に大きな好奇心を抱いて……星弥はそれが、自分ではなく、自分の背後にあるのではないかと推測した。

次の瞬間、地響きのような音が背後で炸裂した。

爆発としか言い表せない轟音に振り返ると、屋上へと通じていた

ドアと、それらを形作っていた周辺の建造物が砕け散り、土煙をあげていた。

——白煙の中から、それは現れた。

赤い一つ目が輝く、硬質な半透明の……そう、未だ背後にある壁と同じ材質の、半透明の結晶のようなもので出来た、”頭”。

ゆらりと揺れ、頭が目測で三メートルほど上に持ち上がった所で、星弥は戦慄した。

結晶の頭。

結晶の胴体。

結晶の腕。

結晶の脚。

おおよそヒトとは似つかないながらも、絶対的にヒトガタといえる結晶の人形が、赤い瞳を輝かせて屋上へとやってきたのだ。

星弥はそれを言い表す言葉を知っていた。

当然のように、顛帯観測もそれを表示する。

ゴーレム。

クリスタルゴーレムだ。星弥はゲームの中でしか想像し得なかった実物大のそれを前にして、心の底から感動し、同時に震えた。

「ガーディアンが完成した！　これでおれの勝ちだね！　降参してももう遅いぜ！！」

背後から少年が高らかに笑う声が聞こえる中を、星弥はただ相対する巨大なそれのみを見つめていた。

赤い瞳が、星弥を捉える。

星弥は、ゴーレムと目を合った。

瞬間、駆け出した。

屋上の反対側……もう一つのドア、階段へと繋がる所だ。

「逃がすかよ！」

ウォールが行く手を阻む。星弥はまた半透明の壁に阻まれながら

も、とにかくドアを目指した。

「あれ、ゴーレムが動かない……おい、動けよ！　ちゃんと呼んだろー！」

背後から少年の怒りの声が響くが、星弥の耳には入っていないなかった。

数枚の壁を避けて、なんとかドアにたどり着く。

背後からガラスを砕くような音がしたのはその直後だった。

ズンズンと重い足音が聞こえる。

振り返りたい。その衝動をこらえて、星弥はドアを開けて階段を一気に飛び降りた。

足に体重分の衝撃が走り、疲労困憊の足が悲鳴をあげる。

同時に、先程までいた背後のドアが悲鳴を上げた。

金属が物理法則にひれ伏し折れ曲がる音と、コンクリートが硬質さを保ったまま打ち碎かれる音。

それと共に粉々になったコンクリートの破片が転がってきて、星弥は踊り場から更に階段を降りる。

階段を降りる時に、斜め上が視界に入った。

ゴーレムがドアを打ち砕き、星弥を視認していた。

そこからは、無我夢中で階段を駆け降りた。

思考の渦に星弥はいる。

あれはやばい。

見た瞬間にわかるやばさだ。

逃げるしか無い。

くそ、また逃げるのか。

逃げてばかりだな俺は。

それに走ってばかりだ。

何で走ってばかりなんだ。

もう疲れてるだろ。

走るのやめちゃえよ。

だけど、走るのをやめるわけにはいかない。

止まったらきつと殺される。
ていうか無理だろあんなの。
どうやって勝つんだ。

あのクラフトの能力は何なんだ。
そもそもなんでクラフトカードが砕けてクラフトになるんだ。
クラフトカードを失ったら負けだろ。
という事は後でちゃんとカードに戻るのかよ。

そういえば佐藤も佐藤と戦った男もクラフトカードを手にして戦いを始めていた。

佐藤がいきなり刀を出した時も確かクラフトカードを手に持っていた。

という事は誰でも出来るのか。

誰でもやるのかあれ。

誰にでもあの機能があるのか。

そんな機能は俺のクラフトにはねえよ。

試したことすらないぞ。

そうだ、試したことすら……………。

星弥は七階へと降りて、三つの”逃走経路”を判別する。

一つは、このまま階段。もう迷っている時間はない。

一つは、廊下の反対側へ。廊下の向こうが崩壊しているのが見える。

一つは、エレベーター。……危険か？　だが乗れば一気に一階へ、病棟の外へ……。

背後から轟音が聞こえる。それに背中を押されて、星弥はエレベーターに入ってしまった。

入った理由は簡単だ。足が疲れていた、ただそれだけである。
振り返り、階数の1を押し、ドアを閉めるボタンを連打する。

踊り場にゴーレムが見えた。まずい。そう思っている内にドアが閉まる。

エレベーターが動き出す。

星弥はドア際から離れ、それからエレベーターに乗った事を後悔した。

小学校の時の担任の先生の言葉を思い出す。避難時には、エレベーターを使うのはやめましょう。

轟音と共に、エレベーターが揺れた。

「うわあ!？」

上で、ブツン、と何かが切断される音と共に、エレベーターが急加速を始める。

確信した。

落ちている。間違いなく落ちてる……!

星弥は悲鳴を上げ泣きそうになっている自分自身とは別に、冷静な視点で己を見る自分を感じていた。

その自分に従い、エレベーターの角に設置されている手すりを掴む。

体が宙に浮きそうだ。

もう落下はどうにかなるものではなかった。

星弥は強く手すりを握りしめて、信仰もしていないどこかの神に祈った。

エレベーターを激しい衝撃が襲う。

瞬間、星弥の視界はブラックアウトした。

……それが数秒だったのか、数分だったのかはわからない。

星弥は手すりに掴まったままの自分を認識し、目を開けた。

視界は暗闇に包まれていた。

エレベーターの電力が落ちたのか。

不思議と気は動転していない。

なぜ助かったのか。

おそらく非常停止装置が作動したのだろう。
なぜ作動したのか。

それは……七階できつと、あの巨大な敵が……。
即座に立ち上がり、星弥は左手を顔に添える。

身体に痛みらしいものはない。不幸中の幸いなのか、興奮して
て痛みを感じていないだけなのかはわからない。

だが、ありがたい。

そう感じながら、星弥は顛帯観測で暗闇を視認する。

そうして見た視界には、しっかりと文字情報が表示されていた。

顛帯観測の視界補助能力は高く、暗闇の中でも文字情報ならば視
認ができる。

右目は視力が向上しているらしいが、夜目が効かない。相変わら
ず真っ暗なままだ。

そうして認識できたのは、壁、ボタン、ドア、壁。

上を向く。天井。

下を向く。床。

当たり前だ。もとよりエレベーターはそれほど凝った機能や設備
は搭載されていない。

エレベーター内が真っ暗な以上、電力がカットされた以外に、損
傷らしきものはないようだが。

……救助隊が来るのを待つか？

そんなバカな考えが頭をよぎった矢先、天井に凄まじい衝撃音が
響いた。

「うおあ?!」

思わず悲鳴を上げた。天井から火花が散る。その一瞬の光で、天
井が凹み歪んだのがわかった。

エレベーターは幸いにも落下しない。だが、上から落下してきた
もの、それは間違いなく、さっきのゴーレムだ!

星弥はエレベーターの隅に身を縮ませる。直後、天井が突き破ら
れ、半透明の光をもった腕がエレベーター中央に着弾した。

凄まじい衝撃がエレベーターを襲う。その衝撃でエレベーターが落ちるのではないかと星弥は恐怖した。

だが、それどころではない。天井から僅かな光がもれる。微かではあるが、右目だけでもエレベーター内が見渡せるようになった。

だが、だからなんだというんだ。

こんな狭苦しい部屋で何をすればいい。

何もできない。そんな言葉が漏れそうになり、振り払う。

何かあるはずだ。探せ。

懷をまさぐる。飴が出てきた。転がす。

ポケットティッシュが二つ。捨てる。

天井が軋む音がして上を見上げる。陥没した天井がこじ開けられようとしていた。

懷にものがなくなり、ズボンのポケットに手を突っ込んだ。

プラスチックのような感触のカードが一枚出てくる。

取り出すと、ディスプレイが微かに周囲を明るく照らした。

『ホルダーとエンカウントしました。』

カードに残されたシステムメッセージをタッチすると、無機質にメニュー画面に戻った。

それどころじゃない。

このカードは重要じゃない。

……いや、カードをあいっつに差し出せば、終わるのか？

今度こそ終わる。

それで終わりだ。

……終わっていいのか？

天井がめくれていく。

終わる保証などない。

そもそも、あからさまにあの結晶で出来た人型は俺を殺しに来ていた。

床から出る檜も、誰も彼も関係なく貫いていたじゃないか。

……そうだ、あの少年は、既に何人もの人を殺めている。

それが、解せない。

理解できない。

無邪気にはしゃぐ姿を思い出して、星弥は心の底からふつつと

湧き上がる感情があった。

まただ。

また、この感情だ。

追い詰められるといつもこれだ……！

「このヤロオ……！」

星弥は、天井に開きつつある穴に向けて、手元にあった飴玉を投げつけた。

それはうまいこと天井の上へと消え、カチンという乾いた音を響かせた。

「この！ このお！」

ポケットティッシュも投げつけた。

だが軽さゆえに軌道に乗らず、天井に届く前に舞い落ちる。

何か武器はないのか……！

右手でものを漁る。暗闇で何も見えないし、そもそもエレベーターの中になど何もない！

クラフトカードはどこへいった。さっきまで右手で持っていたのに……！

くそ！

顛帯観測でエレベーターを再度見渡す。

武器になるもの。

手すり。

その文字を見つけて、それに飛びついた。

飛びつく瞬間、ゴーレムと書かれた文字が天井から飛び出てきた。

床に衝撃が走る。ゴーレムの拳でも突き立ったのか。

構わず、手すりを右手で握り、思い切り引き抜いた。

思いの外簡単に手に”鉄棒”が収まる。

驚くほど軽い。物を持っている感触など殆ど無い。

それでも確かに握られた硬質な鉄棒を掴んで、背後でエレベーター内を手探りするそれに、振りかぶった。

[illegible]

渾身の力で投げつけた。

鉄棒が飛ぶ。

腕と鉄棒が、ぶつかった。

「!」
「?」

瞬間、左目で星弥は光を見た。

それは、”文字通りの光”ではない。右目で太陽を見た時に視認する、あの光だ。

その発光量に、星弥は左手を顔から離し、光を防ぐ事に専念した。

——光が消失する。

…
一体、今のはなんだ？

星弥は困惑するままに、周囲を見渡した。

壁、ゴーレム鉄棒、ドア、光、壁。……ドアが僅かに開き、光が漏れている。先ほどの衝撃で開いたのだろうか。

上を見る。天井ゴースト鉄棒穴。ゴーストは腕を出したまま動かない。

下を見る。床。

星弥はすぐに違和感に気づいた。……ゴーレムが、動かない？
どうした？　ここに来て止まったのか？

星弥はふと、屋上から逃げ延びる際に少年が動かないのだと叫んでいたのを思い出す。

なら、今の内に逃げるしか無い。そう思い、星弥はドアという文字が浮かび上がる場所へとゆっくりと回りこみ。

自分が、左手を顔に当てていない事に気づいた。

「――」

左目の視界に存在する文字群と、右目の視界にあるいつもどおりの視界。

それらが重なりあい、そう……映像に合わせてこれはドアだ、という解説がついているような、スキヤニングされたような視界になっている。

なんだ。何が起きた？

……エレベーターがぐらついた。

星弥はハッとして振り返る。

僅かな光の中で、ゴーレムが腕を動かそうとしているのが目に入った。

まずい、早くここから抜けださなければ……！

ドアに近づき、力のかぎり、エレベーターのドアを開ける。

……僅かにだが、それでも少しずつ、確実にドアは開いていった。光が広がり、星弥は十分にあいたドアの隙間から、身体を滑り込ませるようにして外に転がりでた。

倒れこみそうになった身体を必死で支える。

全身の疲労を、身体が訴えてきていた。

駄目だ。ここで倒れるのはまずい。そう思いながらも膝をついてしまい、右手で辛うじて身体を保つ。

「……？」

星弥は、右手を見る。

――右手に、いつのまにか黒いグローブがはめられていた。

指の部分がない、いわゆるフィンガーレスグローブと呼ばれるタイプの代物だ。

気づいた途端、その肌に張り付くような、皮ともゴムともとれない不思議な感触が手に伝わってくる。

そして、グローブの甲の部分についた……かなり崩した草書体で書かれた……鉄棒、と読むのか？

これは、クラフト……なのか？

右の手に現れたグローブ。そして左目の魔眼。

その変化がもたらした力を、星弥はまだ知らない。

06／鮫嶋利和、拡大？

「……なんだ、こりゃあ？」
さめじまどしかず

鮫嶋利和は無精ひげに当てていた手をおろして、ゆっくりとそれに近づいた。

……目の前には、中途半端な位置で停止したエレベーターがある。話では筐体を支えるケーブルが切れ、安全装置でこの位置に止まったとのことだ。

今は中のそれを調べるためにドアが完全に開かれているが……その”箱の中身”に問題はあった。

鮫嶋は落ち着いて、事実のみを観察する。

無理矢理こじ開け、突き破られたような天井。

何かが着弾し、大穴をあけた床。

ここまでの無茶をしてよく再落下しなかったな、という感想がまづ漏れた。

次に、どうしてこんな状態になったのか？ という疑問が浮かぶ。しかし、中々いい発想は出てこない。

この状況にじっくりとくる解答を、鮫嶋は長年の経験から生み出せずにいた。

……懐の煙草を取り出して吸おうとするが、止める。ここが病院だという事を思い出して、鮫嶋は舌打ちした。

——此咲中央病院で殺しがあった。

そんな通報を警察が受けたのは四時間前の事だった。駆けつけた警察によりすぐに二箇所の事件現場がおさえられ、周

辺を搜索した結果出てきたのが、このエレベーターの惨状であったようだ。

被害者……と思われる男女三名の死亡も確認され、刑事課内部では殺人事件として取り扱う方針がすでに固まっている。

その殺人事件とこのエレベーターの関係があるかと言われればまだ不明ではあるのだが……。

「鮫嶋さん、被害者の身元がとれました」

エレベーターの前で立ち尽くす鮫嶋の背後から、女性の声がかかる。

鮫嶋が振り返ると、それは鮫嶋の見知った人物であった。

凛とした顔立ちに、シャンプーのCMに出てきそうな長身でストリートロングヘアの、パンツスーツの女性。最近出来たばかりの、よく出来た部下である。

「おう、亮子、おつかれ。といってもまあ、全員病院関係者だったろう?」

「……鮫嶋さん、小境こさかです」

「ああ? だから呼びにくいから亮子って呼ぶっつたろーが」

いちいちしつこい奴だ。服装も小奇麗だし、この新人はやたら生真面目で扱いに困っている。

——ヨレヨレのスーツに申し訳程度の清潔感をもたせた無精髭の男、鮫嶋利和と、その女性……小堺亮子は一見して正反対のナリである。

なぜ出世コースからも外れた鮫嶋に、自分の半分程しか生きていない女刑事がつけられたのかは皆目見当がつかない。

が、ついちまったもんはしょうがない。使えるようにするしかないだろう。

鮫嶋はめんどくさそうな顔でいると、小境は小さくため息をついた。

「……まあ、それは一旦おいておきましょう。被害者ガイシヤはこの病院に勤める医師一名に看護師二名。まだ身辺の調査中ですが、暴力団マルぼうと

の関係もまずないと思います」

ややシワの寄った眉間のまま、小境は鮫嶋に資料を渡す。

病院にあったものを即席でまとめたのであろう、写真と略歴がのった紙だ。それをぺらぺらと三秒ほど確認して、鮫嶋はそれを小境に突き返した。

小境はそれに動じず、慣れた手つきで資料を受け取る。

「んで、鑑識はなんて？」

頬をかきながら鮫嶋は続きを促す。

……別件で此咲市外から戻る途中だった鮫嶋が病院に駆けつけた頃には、被害者の遺体などは既に片付けられたあとだった。

そうして細かい調査に入っている鑑識の手を煩わせるわけにもいかず、関連があるか未だ不明のエレベーター前まできていたのである。

「はい。……これですね、どうぞ。三人はいずれも同じ方法で殺されており、全員が即死だったようです。凶器は……」

小境が言いよどむ。そうしているうちに、小境から差し出された資料を流して読んだ鮫嶋は、小境が口をつぐんだ解答にたどり着いた。

「……ああ？　　槍？　　鋭利な長物？　　本気か……？」

資料をバシッと叩いて、再びそれを小境に突き返す。小境は受け取りながら、顔色を変えずに続ける。

「そうとしか考えられないというのが今のところの見解でして。しかも、全て股下から上半身に向けて垂直に貫通していると。細かい調査は司法解剖の結果待ちですが」

「はあ、槍ねえ……しかも股下から、か……」

ボリボリと頭をかき、鮫嶋は足元を見た。

……床から槍が飛び出してきたのか？

どこの忍者屋敷だ。

「それとこのエレベーターなんですが、爆発音のようなものを聞いたと近くの患者が証言しています。上の階のエレベーターの扉は機

械か何かで貫通したように突き破られているので、その際の衝撃音だと思うのですが」

「お、おい……ちょっと待て。上の階のエレベーターのドアがなんだった？」

「ですから、突き破られてるんです。それとエレベーターから屋上までの階段、踊り場、加えて屋上のドア部分もコンクリートごと激しく損壊しています。ブルドーザーか何かが入り込んできたみたい、です」

そうまで大仰に言っておきながら、小境の顔は無表情なままである。

かれこれ二週間になるが、事件に対してストイックな奴というのが鮫嶋の印象だった。

殺人事件にもこの前初めて関わったばかりなのに、顔色一つ変えやしない。本当に女なのだろうか。

まあ、泣いたり吐いたりしながら捜査する新米刑事のお守りに比べればなんのその、というところだが。

「……それにしたって、ブルドーザーっておまえ……屋上に降ろして突っ込ませたっていうのか？」

こんな病院の病棟、しかも一階ならまだしも屋上に？ クレーンか何かで運んで？

馬鹿げてる。

しかし同時に、それが事実なのなら、想像の域では最もそれらしい答えの一つであることも確かだ。

「こちらで鑑識……それに専門家を呼んで調査にあたっていますが、まだ事件との関連性は不明です。科捜研、科警研にも要請を出したので、これも到着と結果待ちです」

「……監視カメラの映像は？」

「病棟の廊下、エレベーター共にカメラが設置されていたそうなんです。もうすぐ準備が出来ると思います。病院の会議室を借りて、そちらで映像を出力する手筈になっていますので、そろそろ向かい

ましょう」

「なるほど、手際がいいねえ」

「最初の一週間で手際は覚えましたが。案内しますよ、鮫嶋警部」
そうして鮫嶋を促し歩き出す小境を、鮫嶋はちんたらと追いかけて会議室へと着いた。

他にも刑事がいるかと思ったが、居合わせたのは映像の出力準備を進めている病院関係者と警官だけである。

「他の奴らは？」

「警察署の方に本部が設置されたのでそちらに集まっていると思います。ここで監視カメラの映像を確認して、有益なものがあるならこの場で編集して持ち帰ります」

「使いつ走りかよ」

「遅刻のついでですよ、警部」

「うるせえ、俺だって好き好んで桜田門に行ったわけじゃねえ」

「……はい、お願いします」

鮫嶋の小言を知ってか知らずか、小境は既に一步踏み出して映像の再生を始めるよう指示を出していた。

「……………」

「鮫嶋さん、始まりますよ」

「……………はいよ」

そうして鮫嶋も一步踏み出すと、じゃあ後はお願いします、という病院関係者の退室の声の後、液晶テレビに映像が映し出された。直接そのままを持ってきたらしく、まずはただの廊下の映像が映し出される。

「……十一時半頃まで進めて下さい」

小境がノートパソコンをいじる警官に指示を出す。

「死亡推定時刻は？」

「死体の状態や発見時の状況から十一時から正午までとの見解でしたので……止めて下さい、ここからゆっくり早送りで」

ゆっくり早送りって？　そう思う鮫嶋をよそに、めぐるましく進

んでいたデジタルの時刻が、確かにゆっくりとした早送りになった。それでもまだ、しばらくただのありきたりな風景が続いていく。変化が現れたのは、ゆっくりとした早送りにしてから一分後の事であった。

映像がブラックアウトする。

ほんの二秒程ですぐ元の映像に戻ったが、しかしその映像にはまだ異常が出ていた。

「……これは一体？」

「いえ、病院の人間の話では生データとのことです。何がなによら……」

小境と警官が目丸くする中、鯨嶋だけがそれを厳しい目で眺めていた。

……黒く塗りつぶされた長方形が、廊下の窓際に佇んでいる。

それは黒帯の大きさからして、おそらくそこに人がいるであろう事を鯨嶋に連想させた。

画面が黒く染まった時間でどこからか現れ、窓際に歩み寄ったであろう黒帯。

そこに、看護師の女性が近づいてくる。

「……おい、なんだこの黒いのは」

鯨嶋は出ないであろう答えを求めて、疑問をつぶやく。

「いえ、こちらでは何も……すみません、さっきの人をもう一度ここへ」

「わ、わかりました」

小境が対処する間も、鯨嶋はじっと画面を見つめていた。

看護師の女性が近寄って身振り手振りで話しているのがわかる。

彼女が近づいてそうしている以上、黒い帯はやはり人間なのだろう。何かを話し終えた看護師をよそに、黒い帯は走るようなスピードで奥の階段へと消えて行く。そして……。

看護師の女性が、より大きな黒い帯に覆われ、直後、黒帯が解けると同時に血まみれの死体になって現れた。

「……っ！」

鮫嶋は目を見張る。隣で小境ですら息を呑むのが耳に入った。

その場に倒れ動かない看護師の女性をよそに、黒い帯は階段へと駆け抜けていく。途中、通り過ぎた部分に何度か黒帯がかかる。

「なんなのこれ……モザイク？ どうして？」

素の声を小境が漏らした。

「亮子、本部に問い合わせて何人か刑事をこっちに回せ。カメラ映像がいじられた可能性が高い、特捜も呼べ。さっきの男も含め監視カメラの映像に関われるやつを任意同行するぞ。この調子じゃ他の監視カメラも同じかもしれないが、念のためお前の方で調べてくれ」
そう言って踵を返す鮫嶋に小境は驚いて声を出す。

「さ、鮫嶋さん！ 鮫嶋さんはどこへ？」

「デスクワークは好きじゃねえんだよ！ 俺は先に病院の関係者を洗う！ 細かい雑務は頼んだぞ、新人！」

そうして部屋を飛び出した鮫嶋は、急ぎ足で歩を進めながら、頭の中で鳴り響く危険信号を感じ取っていた。

監視カメラの改ざん。そんな事が簡単にできるのか？

そもそもなんであれだけの騒ぎがあって、なんで犯行現場に誰も居合わせなかった？ 此咲で最も大きな病院なんだぞ？

嫌な予感がする。可能ならば、その予感には当たって欲しくない。だが、鮫嶋は経験則でわかっている。

この感覚を抱いた時は、必ずといっていいほど危険なヤマなのだ。

*

「くそ、くそ！ くそ……！」

怒りのあまり、車椅子の少年……貞義は、何度も何度もディスプレイに拳を降ろした。

その度に振動が波紋になり画面を揺らす、画面が伝える情報は変わらない。

『結晶の守護者 石化』

『COST 2／10000』

『HEAT 100%』

『SYSTEM…結晶の守護者の召喚を終了します。』

いくつかの赤い文字列が、エレベーター内部に入った守護者……クリスタルゴーレムの”行動不能”を伝えたログを残していた。

何だよ！ 何で！ 何で動かなかったんだ！

冷静さを失った貞義には——それを抜きにしても、インターフェイスの無機質な情報からでは——何が起きたのかはわからない。

しかし、未だ貞義が理解していない針の夢城の欠点が露呈する形で、彼は敵ホルダー……星弥を完全に見失った。

——感情を爆発させる貞義をよそに、通報を受け駆けつけた警察が病院周辺に警官を配備し、病棟は警察の監視下に置かれつつあった。

『三日目が終了しました。経過報告を開始します。▽』

『今日の一言…そろそろ皆さんもクラフトの使い方、わかってきたんじゃないませんか？』

新しい何かに気づいたら、参加証をご確認下さい。

理解が深まる度に、広がる知識あり！▽』

『四日目を迎えたプレイヤーは十二人。三日目のリタイアは一名となりました。▽』

▽
『リタイアされた方のお名前、リタイア原因は以下のとおりです。▽』

『【もりたかずなりさま】

ホルダーを発見し先手を打ちましたが、為す術もなくカードを破壊されました。

完全に力負けです。残念、アンラッキー。相手が悪かったですね。

▽』

『それでは、ゲームは四日目へと突入します。

残りの参加者の皆様に、ナイアーラトテップの微笑みがありますように▽』

『ナイアーラトテップの微笑み』

ゲーム続行 四日目

星弥はどうやって自宅にたどり着いたのか、記憶が曖昧になっていた。

エレベーターから何とか脱出し、転がりでて……。騒ぎが大きくなる中、病院を後にして……。

……あとは、無我夢中でその場を離れた。そんな断片的な感覚だけが残っていた。

そんな回想をしているのはベッドの中で、帰り着くなり疲労困憊で倒れこみ、這うようにしてベッドに入ったのだけは覚えている。

そうして、いつの間にか手元に転がっていたクラフトカードの経過報告だけを確認し、星弥はテレビへと目を移した。

……こんなにテレビを身近に感じたのは、生まれて初めてかもしれない。

星弥はそう思いながら、ベッドに横たわったままニュースを眺める。

『警察によりますと、午前十一時半ごろ、此咲市中央区にある此咲中央総合病院の病棟で、血を流して倒れている医師や看護師、あわせて三名を病院の関係者らが発見し、間もなく死亡が確認されました。死亡したのは――』

少し身体を起こそうとするが、体が悲鳴をあげる。

……所々打ち身もしているが、根本的なものは筋肉痛だ。しばらくは痛みが続くだろう。

そう思いながらも肩をまわすと痛みが走り、思わず声が漏れる。

『――また、同じ病棟内でエレベーターが損壊するなどの事故も発生しており、警察では事件との関連性を調べています』

エレベーター。

昨日の出来事が、手に取るように蘇ってくる。

巨大な腕に貫かれた床。

無我夢中で手当たり次第にものを投げつけた。

そして……。

右手を観る。

特におかしいところはない。

だが、あの時たしかにこの手にグローブがはめられていた。

——クラフトカードが変形し、クラフトになる。

星弥がその結論に至るのに、あまり時間はかからなかった。

昨日の時点でも考えていたことだ。

佐藤が手品のように刀を取り出していた事や、あの病院で出会った少年が目の前でやった事を考え、星弥が行き着いた答え。

……それだけじゃない。星弥はそう思い立ち、体の痛みを引きずりながらもベッドの対岸にある棚からそれを取り出した。

最初の手紙、招待状。

その一文に抱いた疑問に対しても、この推測はつじつまが合う。

——参加証はどうやって壊すの？

——参加証をご覧になればわかりますが、参加証は常に危険に晒される立場であり、最強の切り札である事をお忘れなく。

最強の切り札であり、常に危険に晒される立場。

それはつまり、『クラフトカードそのものがクラフト能力に大きく関わっている』事を意味しているのではないだろうか。

例としてあげるならば、佐藤の日本刀のようなクラフトがもつともわかりやすいはずだ。

クラフトカードはクラフトでしか破壊できない。このルールに基づくならば、佐藤はあの刀でクラフトカードを斬らなければならな

い。

……しかし、『この刀そのものがクラフトカード』だったとしたら？

佐藤はクラフトカードを破壊するために、常に自分のクラフトカードⅡ刀を武器として最前線に置かなければならない。

最強の切り札であり、常に危険に晒される存在、それがクラフト、クラフトカード。

……なら、俺の顛帯観測はなんだ？

星弥が行き着いた疑問はそこだ。

星弥はクラフトカードの変形など一度もした事がなかったし、させようと考えたこともなかった。

そもそも、この魔眼が発現する時点でクラフトカードが必要だという記述もなかったし、今でも必要だという記述は……。

「あ」

星弥は、エンカウントやホルダーサーチの一件を思い出し、クラフトカードを確認した。

……クラフト、メンバー、デイクシヨナリに『New!』の文字がついているのをみて、思わずため息がもれた。

なんて都合のいい、現金なシステムだ。

無機物に苛立ちを覚えても仕方ないとは思いながらも、呆れ顔のまま星弥はクラフトカードの更新内容を確認していった。

更新内容は三種類。『顛帯観測』、『病院で出会った少年』、そして『クラフトの実体化』だ。

まず、顛帯観測の能力解説に変化が現れていた。

『名称	顛帯観測 てんたいかんそく
種別	魔眼・魔手 Update!
能力	超能力型 そくそく
RANK	Update!

【攻撃／G】 【防御／G】 【敏捷／G】 【魔力／C】 【視界／B

十

スキル 《魔界視》 《身体強化…視力》 《属性干涉》 Ne
w!

左目に発現する菱形の瞳と、右手に備わる甲の黒手。万物を理解しうる全知の魔眼と、万物に触れうる全能の魔手。

視界内に捉えた万物を所有者の理解しうる媒体で表示し、またそれに干涉し多様な操作が可能。

捜査型、干涉型のクラフトとしては王道で強力だが、星弥のクラフトランクはCであり、完全な能力発現とは言い難い。』

甲の黒手。昨日発現したフィンガーレスグローブの事であろう。その解説を加え、能力ランクが上昇しているのがわかる。

また、新たにスキルが一つ。

『《属性干涉》 RANK／－（不明）

スキル《魔界視》により見た属性に接触することが可能な能力。

手でふれその属性を持ち歩くことができ、これを何らかの物体に組み合わせることで、その物体に属性を付与させることが可能である。

あまりに非常識な力に見えるかもしれないが、その非常識さゆえに、常識に囚われている程使用が困難なスキルである。

強固な意志なくしては使用は不可能であり、使用条件も厳しいことから能力としての初期表記はされず、副次的なものとして扱われている。』

属性干涉……属性に触れ、操り、組み合わせる能力。これが星弥にはいまいち理解ができなかった。

属性を持ち歩く？ 組み合わせる？

辛うじてわかる事といえば、属性を付与させる、の部分だろうか。例えばRPGなどのゲームには属性という概念があり、火や水、

風や土といったグループの括りの下、それぞれが得手不得手をもっている。

そういう何らかに属するものを属性と呼び、ファンタジーなゲームならば剣に炎を宿して火属性にする、といった魔法がある。

属性の付与というのは、いわばこの剣に炎を宿す、という概念だと考えていいのかもしれない。

だが……魔界視により見た属性、という文章がしっくりこない。

顛帯観測が表示する文字情報……ここでは属性としているが、よくするに壁を見たら壁、床を見たら床、と出ているこれらの事であろう。

剣に壁という属性を付与してどうなるというんだ？

「……なるほど」

星弥は理解した。

何を理解したかという点、いかにこのスキルが”非常識”であるかという事だった。

その非常識さゆえに、常識に囚われている程使用が困難なスキル。記述の通りだ。これは実際に試して、出来る範囲でやっていくしかない。

そう考えて、星弥は胸の高鳴りを感じた。

……その高揚感に、今はやや後ろめたさを感じる。

初めて顛帯観測を手に入れた時の自分を思い出して、星弥は苦笑した。

バカだった。

もっとよく考えていれば、あんな怖い目にも合わなかったかもしれないのに。

——それでも

「……やってみるか」

*

クラフトの実体化。

それはクラフトカードを手に持ちクラフト名を念じたり、口にしたりする事でカードがクラフトとして発現する” 初歩的なシステム” のようだ。

星弥はまず室内で簡単にそのテストを始めた。

――顛帯観測。

右手にクラフトカードを持ち、念じる。

するとクラフトカードが光の粒子になり、手の甲に集まっていく。……微かに熱を帯びた光に驚きながらも、そうして形になったそれに息を飲んだ。

黒手と記述されていた、フィンガーレスグローブ。

触ってみると、皮のようなゴムのような、なんともいえない材質の肌触りがある。

「すげ、どうなってんだ……？」

なぜあのカードが碎けてこのグローブになるのかは理解できないが、深く考えても仕方ない。

それよりも、まず疑問をもつべきは、なぜ” 今までクラフトの実体化ができなかった” のか、だ。

デイクシヨナリの項目はホルダーが一度確認した知識しか追加されないのは確認済みだ。

なら、星弥にとってクラフトの実体化は開始時点では存在していなかった要素になる。

招待状にもその下りはなかったし、そもそも星弥の顛帯観測の使用条件は『左手で左目周辺に触れている事』だ。

ところが、このクラフトの実体化後は違う。

右手にこのグローブが装着されてからは、何もせずとも顛帯観測が発動しているのがわかった。

それも、今までは左目、右目と意識してみなければ判別がつかない

かったものが、統合され一つの視界としてクリアに情報を示している。

これは劇的な変化だ。

左手を顔に添えた状態というのは予想以上に疲労するし、動きづらい。ましてや、左手を負傷した際には使用できなくなる可能性さえあった。

だが、この状態ならばより自由な動きで、自然に顛帯観測を使用する事ができる

……ただ、新たな短所は生まれた。

「クラフトカードが使えない……か」

考えてみれば当然だ。様々な情報、機能を搭載しているクラフトカードも、カードの形を保っていなければ使用はできない。

試してみたものの、案の定ホルダーサーチはクラフトを実体化した状態では発動しない。おそらくエンカウントに関してもそうなのだろう。

いかにホルダーサーチ、エンカウントを使うためにクラフトカードを使い、どのタイミングでクラフトを実体化させるか。

その切り替えの判断は重要な要素かもしれない。

それに何よりも、それをもって有り余るメリットがクラフトの実体化には存在するはずだ。

星弥の中には、スキルの解説を噛み砕いたある程度のイメージネーションが生まれ始めていた。

あとは、訓練が可能なスペースの確保だけだった。

……自分の部屋で行なってもいいのだが、よくわからない力である以上、何が起こるかかわからない。

使った瞬間に爆発、アパートごと吹き飛んで真っ黒焦げ……なんて事はないにしろ、取り返しのない事態になるのが星弥は一番怖かった。

人様に迷惑をかけてはいけない。かつて叔母に口を酸っぱくして

言われた事だ。

こうして育った今でも他人を頼るのに抵抗があるものだから、学校でも割と”優等生”のままにいる星弥にとって、何かトラブルが起きて居住区で問題視されるのは避けたかったのである。

よって、星弥が選定したのは人目につかず、多少の無茶が効き、人里離れた場所であった。

そんな都合のいい場所が此咲市のあるのかというと……あった。
南此咲。

東西南北で区画も街並みも劇的に変化する此咲市だが、その中でも特に開発が全く進まない地区が南此咲だ。

昔からこの土地に住む地主が開発を推し進める都市開発派と真っ向から対立しているとの話だが、細かい事情は星弥も知らない。

とにもかくにも、此咲市において森林、山、農村といった概念が集中する南此咲だからこそ、その一角に星弥は秘密の練習場を置くことにした。

未開発地域とはいえ、観光客からの収益で栄えている此咲市においては南此咲もその対象であり、一部はハイキングコースとして少なからずの人気がある。

そんな人気のある場所から更に奥地に入り、入ってはいけないという旨の看板があるような場所に見つけた野原を星弥は利用させてもらう事にした。

早速、クラフトを実体化する。

右手に現れるフィンガーレスグローブ……顛帯観測の黒手。

その特性、その能力を

この力で何ができるのか。

知らなければならぬ。

顛帯観測というクラフトを。

そして、またあの少年に会いに行こう。

病院で出会った、星弥が今現在知るただ一人のホルダー。
おそらく、今度こそ真正面から戦う事になる。

……いや、戦えるようにならない。

星弥の中に、小さくも確かに存在する、一つの目的。

その目的の為に、星弥は顛帯観測を使う訓練を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1826w/>

ナイアーラトテップの微笑み

2011年11月12日03時24分発行